

平成22年度

**幼児（3・4・5歳児）をもつ保護者の
子育てに関する調査のまとめ**

福岡県立社会教育総合センター

はじめに

家庭教育はすべての教育の出発点であり、基本的な生活習慣・豊かな情操・自立心等を育成するといわれています。

しかし、少子高齢化や人間関係の希薄化等、社会状況の急激な変化にともない、地域や家庭の教育力が著しく低下しており、子どもたちの規範意識の低下等が危惧されています。

このような中、平成18年には、教育基本法が改定され、新たに「家庭教育」に関する条項が加わったところです。さらにこれを受け、平成20年度に定められた「教育振興基本計画」では、特に重点的に取り組むべき事項のひとつとして「家庭教育支援」があげられており、家庭教育に関する情報の提供、相談等総合的な取組を関係機関が連携して実施するよう促されています。

当センターでは、福岡県における家庭教育の実態や課題を明らかにするため、昭和55年度から、幼児・小学生・中学生をもつ親等を対象に、「親の養育態度・意識の実態調査」を経年で実施し、時代とともに変化する親の養育態度・意識を比較・検証してきました。

本年度は、県内の3・4・5歳児を持つ親等の養育態度や意識の実態について調査し、平成7年度、平成12年度、平成17年度に実施した過去3回の調査と経年比較しながらその分析結果をまとめました。

近年、親の養育態度や意識は年々多様になってきており、きめ細やかな家庭教育支援を行うためには、子育て中の親の現状を十分把握する必要があります。本報告書が家庭教育に関する課題解決に向け、家庭教育支援担当者をはじめ多くの方々にお役に立てば幸いです。

なお、これまでの調査報告書は県立社会教育総合センターのホームページ「ふくおか社会教育ネットワーク」の「福岡県内データ集」で検索できますので、是非、御活用ください。

おわりに、本調査を実施するにあたり、御尽力いただきました福岡教育大学の井上豊久教授、調査に御協力いただきました各幼稚園・保育所（園）の保護者・職員の皆様、関係教育委員会の方々に心からお礼申し上げます。

平成23年3月

福岡県立社会教育総合センター
所長 角 伸幸

目次

第1章 調査の概要

1 調査の目的	1
2 調査の方法	1
3 分析の基本的視点	3

第2章 親の養育態度

1 基本的生活習慣	4
2 言葉のしつけと手伝い	9
3 「親の養育態度」に関するまとめ	11

第3章 親子の交流

1 子どもの認知	13
2 子どもの受容	15
3 「親子の交流」に関するまとめ	17

第4章 親の養育意識

1 養育の目標と家庭外の教育	19
2 自己評価	21
3 養育の悩みや課題	22
4 「親の養育意識」に関するまとめ	28

第5章 変遷と総合分析・提案

1 15年間の幼児に対する家庭教育の変遷	31
2 総合分析と提案	36

第6章 参考資料

○ 実施要項	41
○ アンケート問題用紙・回答用紙	43
○ データ集	48

第1章 調査の概要

1 調査の目的

子どもに対する保護者の養育態度・意識は子どもの発達に大きく関係しており、その実態を把握することは、今後の家庭教育支援・子育て支援の在り方や方向性を検討する上で大変重要である。

そのために、福岡県では昭和55年から5年ごとに、幼児・小学生・中学生を持つ親を対象に「父親・母親の養育態度・意識の実態調査」を実施してきた。

本年度は3・4・5歳児を持つ親の意識についての調査を行い、次の点を検討した。

- 親の養育態度や意識の実態について明らかにする。
- 平成7年度、12年度、17年度に実施した調査と比較し、その経年変化をたどることで、時代とともに変化する親の養育態度や意識を明らかにする。
- 今後の福岡県の幼児期における家庭教育の充実・振興の基礎資料に資する。

2 調査の方法

(1) 調査の対象

本調査は、福岡県下の36の幼稚園・保育所（園）の3・4・5歳児の保護者を対象に実施した。なお、調査幼稚園・保育所（園）に関しては基本的に過去3回の調査園と同一の園に依頼した。各園の回収できたものから記入者が父親・母親以外のものを除いた3・4・5歳児の父親1,140名、母親1,901名を有効回答とした。有効回答の内訳を子どもの年齢・性別で分類すると、表1・2となり、また、幼稚園・保育所（園）別、親の年代別で分類すると表3・4のとおりである。

(2) 調査の方法

本調査は質問総数27項目からなる調査票「幼児（3・4・5歳児）をもつ保護者の子育てに関するアンケート」により無記名で行った。調査票は男性の保護者用と女性の保護者用を作成し、質問の構成と内容は同一のものとした。

調査票は、大きく「親の養育態度」「親子の交流」「親の養育の意識」の3領域で構成し、「親の養育態度」の領域では、主に基本的な生活習慣やしつけについて、次に、「親子の交流」では、子どもの認知や受容について質問している。また、「親の養育意識」の領域では、子どもを養育するにあたっての目標やしつけ等に対する自己評価、さらには悩みやその解決方法と今後期待する支援方法について問いかけた。質問項目の構成については表5に示している。

(3) 調査の実施方法と時期

調査の実施にあたっては、調査に協力いただいた幼稚園及び保育所（園）に調査票を直接持参し、学級担任をとおして各家庭に配布し、記入をお願いした。調査を実施した時期は平成22年9月である。調査に協力いただいた幼稚園・保育所（園）所の名称は本報告書の第6章に記載している。

表1 子どもの年齢・性別による父親数（単位：人）

	3歳	4歳	5歳	合計
男子	176	215	266	657
女子	96	204	181	481
男女不詳	2	0	0	2
合計	274	419	447	1,140

表2 子どもの年齢・性別による母親数（単位：人）

	3歳	4歳	5歳	合計
男子	235	336	371	942
女子	220	357	380	957
男女不詳	1	0	1	2
合計	456	693	752	1,901

表3 子どもの幼稚園・保育園（所）・年齢別による親数（単位：人）

		3歳	4歳	5歳	小計
父 親	幼稚園	74	194	245	513
	保育所(園)	200	225	202	627
	小計	274	419	447	1,140
母 親	幼稚園	125	309	373	807
	保育所(園)	331	384	379	1,094
	小計	456	693	752	1,901
合計		730	1,112	1,199	3,041

表4 親の年代別人数（単位：人）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	未記入	合計
父親	0	112	702	296	26	1	3	1,140
母親	0	292	1,295	311	0	0	3	1,901
合計	0	404	1,997	607	26	0	6	3,041

表5 調査票の構成

養育態度	親子の交流	養育意識
基本的な生活習慣	子どもの認知	養育の目標と家庭外の教育
1. 朝食 2. 就寝時間 3. 起床の仕方 4. 洗顔・歯磨き 5. 食事時のテレビの視聴 6. テレビの視聴時間 7. テレビゲームで遊ぶ時間	11. ほめる 12. しかる 13. 男女の区別	17. 育てる上での重点 18. 習い事
	子どもの受容	自己評価
言葉のしつけと手伝い	14. 対話 15. スキンシップ 16. 読みきかせ	19. しつけの自信 20. しつけの甘さ
8. あいさつ 9. 言葉の乱れ 10. 手伝い		養育の悩みや課題
		21. 子育ての楽しさ 22. 子育ての孤立感 23. 子育てのイライラ感 24. 子育ての不安・悩み 25. 子どもの登園の悩み 26. 悩みの解決法 27. 望んでいる子育て支援

※1～27の番号は、アンケートの質問項目番号

3 分析の基本的視点

調査結果の分析は、調査票の構成に沿って行った。質問毎の特徴や傾向を把握するために、結果の集計は父親・母親別に行い、パラメーターとして幼稚園・保育所（園）別、年齢別、男女別に分析し、それぞれについて説明した。

さらに、平成7年度、12年度、17年度に実施された調査と比較検討し、15年間の親の養育態度・意識の変化のありようについて分析・考察を行った。

なお、分析にあたり、○は平成22年度の調査から分かったこと、◎は平成7年度、12年度、17年度調査の経年比較から分かったこと、●は、平成22年度の調査のクロス分析（項目関連分析）から分かったことを表している。

また、経年比較は過去のデータを考慮し、4.5歳児のデータのみで行っていることと、質問ごとのグラフについては、無回答の度数は省略していることを御了承願いたい。

第2章 親の養育態度

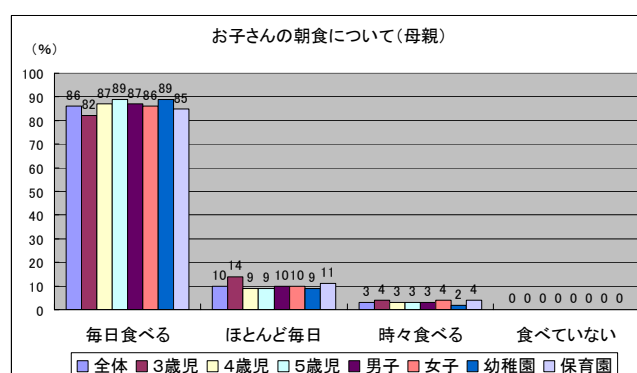
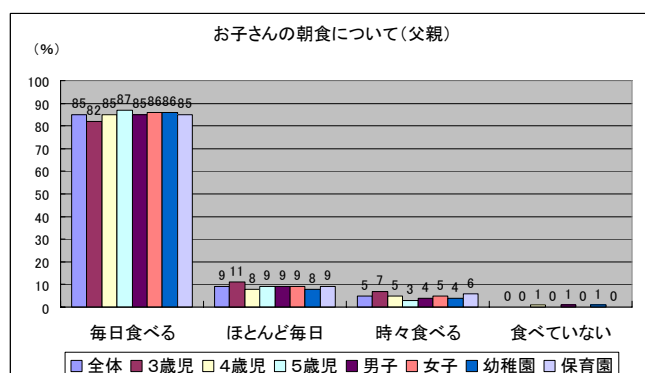
1. 基本的な生活習慣

子どものよりよい成長・発達にとって幼児期における基本的な生活習慣づくりは最も重要な課題の一つであり、親がその重要性を理解し、繰り返し伝えていくことで生活のリズムをつくっていくことが求められる。この基本的な生活習慣の確立のための親の関わりを「朝食をとる頻度」「就寝時間」「起床のさせかた」「洗顔・歯磨き指導」「食事時のテレビの視聴」「テレビの視聴時間」「テレビゲームで遊ぶ時間」から考えてみる。

(1) 朝食をとる頻度について

あなたのお子さんは、朝食を食べていますか

- 「毎日食べる」と答えた割合が最も高く、父親85%、母親86%と高い割合になっている。平成17年度よりも父親で2ポイント、母親で3ポイントと着実に割合が高くなっている。
- 子どもの年齢が上がるほど、「朝食をとる」頻度は高くなり、保育所（園）よりも幼稚園の割合が高くなっている。要因として、子どもの食欲不振、保育所（園）に比べて幼稚園の始まりが一般に遅いというだけでなく、保育所（園）の母親は仕事に出るため朝は時間が取りにくいということが考えられる。
- 朝食をきちんととることは、子どもの身体の発達にとって重要であるが、食欲は、生活リズムや遊びに大きく左右されるということにも留意が必要である。



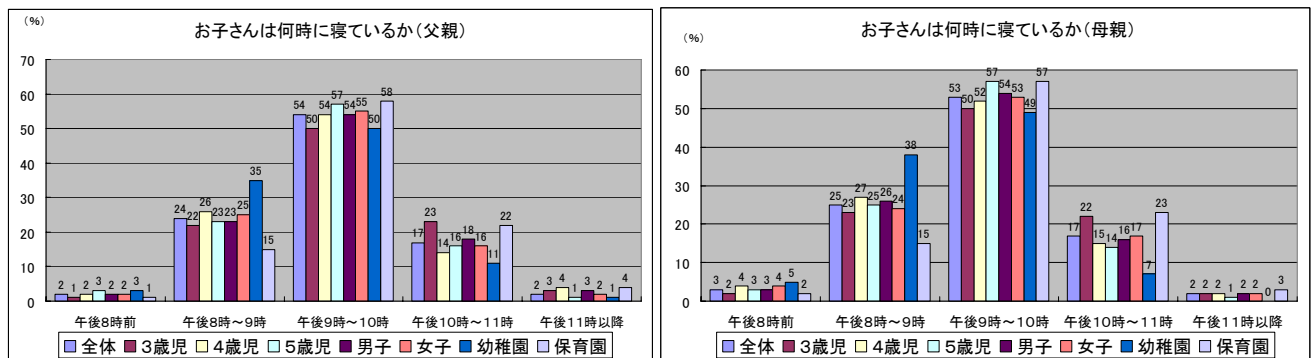
(2) 就寝時間について

あなたのお子さんは、だいたい何時に寝ていますか

- 父母ともに「午後9時～10時」と答えた割合が最も高い。
- 幼児が十分な睡眠をとるためには、9時前には寝る必要がある。しかし、「午後9時前（「午後8時前」と「8時から9時」の合計）」と答えた割合を見てみると、前回同様、相変わらず、両親とも3割に満たない。父親については、年齢の低い3歳が5歳より3ポイント低く、また保育所（園）が幼稚園より22ポイント低くなっている。母親についても父親と同様、年齢の低い3歳が5歳より3ポイント割合が低く、前回同様、保育所（園）が幼稚園より遅寝であり、26ポイント低くなっている。
- 「子どもが午後10時以降に寝る（「午後10時から11時」と「午後11時以降」の合計）」割合

は父親では前回 25% に対し今回 19%、母親では前回 22% に対し今回 19% と減少してきている。幼保別では父親の割合は、幼稚園が 12%、保育所（園）が 26% と 14 ポイント差となっている。母親も同様に幼稚園が 7%、保育所（園）が 26% と 19 ポイント差となっている。ポイント差は両親とも前回とまったく同様であり、保育所（園）児の遅寝が顕著である。

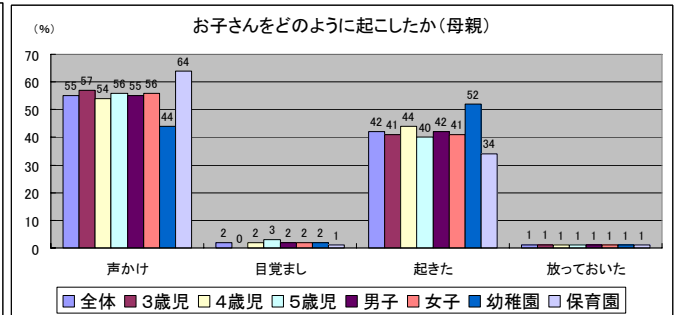
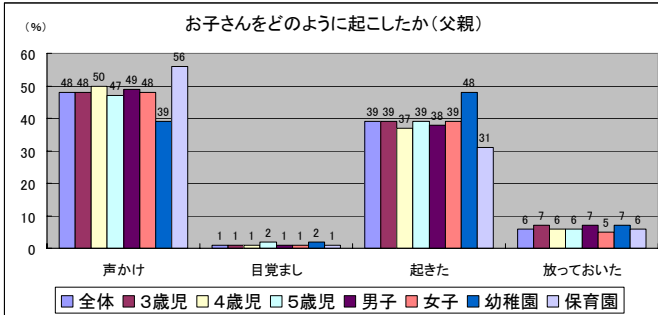
- 幼保間に見られる格差の要因として、保育所（園）では、午睡をとるところもあり、子どもの就寝が遅くなる要因の一つとして考えられる。その他、保育所（園）の場合、親、特に母親も遅く帰ってくるため、子どもも寝る時間が自然と遅くなっているのではないかと考えられる。子どものよりよい成長のために早寝や睡眠の重要性に対する理解が不十分であることもあろう。また、親子交流の重要性もあり、遅くに親子でなにかしていたり、テレビやゲームをおこなったりと、結果として子どもの生活時間が親の生活リズムに合わせられてしまっていることが懸念される。



(3) 起床の仕方

あなたは、今朝お子さんをどのように起こしましたか

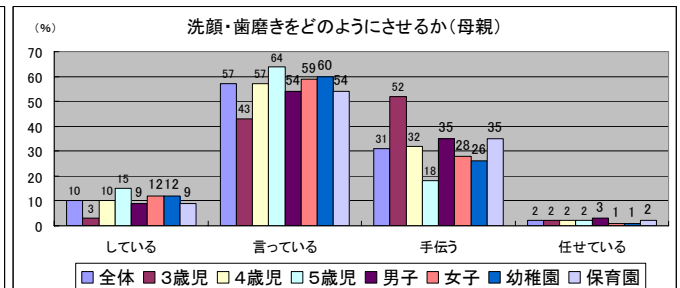
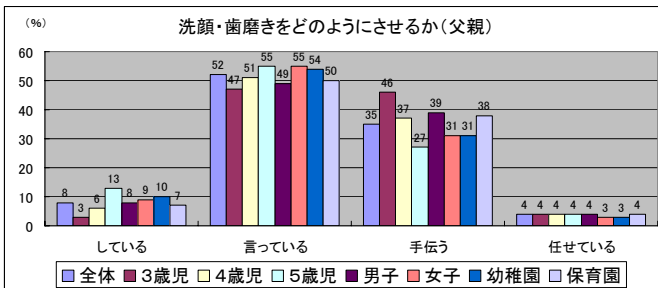
- 父母ともに「声をかけた」が約半数、「起こす前に自分で起きた」約4割と答えた割合が高い。
- 自立起床の一つの指標として「起こす前に子どもが自分で起きた」と答えた割合は、父母ともに年齢間でそれほど差は見られない。幼稚園と保育所（園）とでは、保育所（園）が幼稚園より父親17ポイント、母親18ポイント、自立起床が前回同様に保育所（園）では出来ていない実態があり、幼保間で差が見られた。
- 幼稚園、保育所（園）の開始時間の違いと親の就業条件から自分と一緒に出るためには「早く起こさないといけない」という事情も推測される。
- 前出の結果と併せて、就寝時間が遅く、起床時間も早い保育所（園）の子どもは、幼稚園の子どもに比べて睡眠が充分にとれていないことが推測され、そのために子ども自身も心身の状況として起きづらく、自立起床が困難になりがちであると推察される。
- ◎ 経年比較において父親は「放っておいた」が平成7年度の20%から、平成22年度は6%と、年々減少してきており、明らかに父親の関わりが増えてきたことがわかる。
- ◎ 幼保別では幼稚園児がどちらかという自立起床ができているといえるが、平成7年度の調査では格差があまりなく、平成12年度・17年度の調査では格差が大きくなっていたが、今回も同様の結果であった。



(4) 洗顔・歯磨きについて

あなたは、お子さんに洗顔や歯磨きをどのようにさせていますか

- 幼稚園・保育所（園）においても排便等に加えて洗顔・歯磨き指導を行う場合が多いが、洗顔・歯磨きは、やはり親を模倣しながら「自分もしたい」と真似するところから始まるのが基本であろう。調査では、父母ともに「言ってさせている」と答えた割合が最も高い。
- 「言ってさせている」と答えた割合を見てみると、父親52%、母親57%と、ともに年齢が上がるにつれて「言ってさせる」割合が高く、逆に「手伝ってさせている」割合は年齢が上がるほど低くなっている。手伝うところから、徐々に言うてできるようになっていくのであろう。
- 幼稚園は保育所（園）よりも「言ってさせている」割合が高く、逆に保育所（園）が「手伝っている」割合は高い。
- ◎ 父母別に4. 5歳児の合計で変遷を平成7年度から22年度の変遷をみると、「手伝ってさせている」割合は父親で平成7年度13%、平成12年度22%、平成17年度24%、今回32%と19ポイント、母親で平成7年度15%、平成12年度20%、平成17年度23%、今回25%と10ポイント割合が増加しており、子どもの世話をする親は確実に増えている。つつい忙しくて、手伝ってしまっているという現状も推測される。
- ◎ 反対に「しなくても子どもに任せている」割合は父親で平成7年度17%、平成12年度13%、平成17年度7%、今回4%と15年間で13ポイント下がっており、無関心や放任の父親が減り、父親の子育て参加が進んできていることが見て取れる。

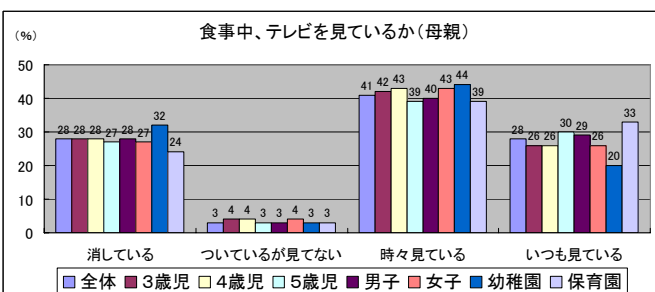
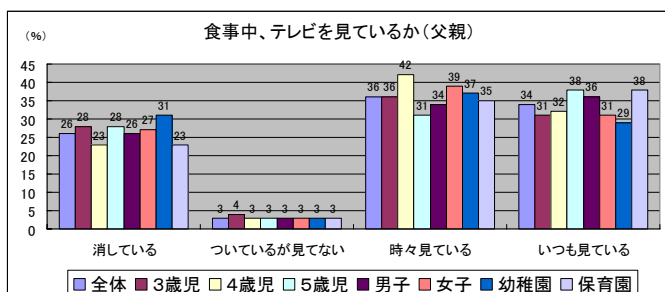


(5) 食事中のテレビ視聴について

食事中はテレビが話のきっかけになることもあろうが、やはり、テレビを消し、団らんの中での親子会話が求められる。

あなたは、お子さんに食事中テレビを見せていますか

- 「時々見ている」と答えた割合が父親36%、母親41%と、ともに最も高い。
- 「いつも見ている」と答えた割合は、父親34%、母親28%と、父親が母親より6ポイント高く、母親より父親の方が、子どもに食事中テレビを見せている傾向があることが分かる。3分の1の親がテレビをつけっぱなしで、いわゆる「ながら族」となっているのではと懸念される。話題の乏しさや直接の親子交流の仕方等の未熟さもあると考えられる。
- 幼稚園は保育所（園）よりも「消している」割合が高く、逆に保育所（園）が「いつも見ている」割合は高い。保育所（園）の場合、帰宅時間が遅い場合が多く、食事の際に、テレビに子守をさせていることも推測される。



(6) テレビの視聴時間について

情報社会の現在、インターネットやケータイが新しく入ってきているとはいえ、現代社会においては、子どもにとってだけではなく、親にとってもテレビは空気のような存在であり、生まれたときから情報を届けてくれる便利な機械である。子どもの早期教育にもビデオが活用されるなど、日本の子どものテレビ視聴の長さは世界の中でも長時間視聴の割合が高く、日本小児医学会などその長時間接触の問題性を指摘する団体も出てきている。

あなたのお子さんは、ふだん1日にどのくらいテレビ（ビデオも含めて）を見えていますか

- 「1～2時間」と答えた割合が最も高くなっている。
- 全体としてはテレビの視聴時間はわずかながら減少傾向にあると言えよう。
- 「3時間以上」と答えた割合を保育所（園）・幼稚園別に見てみると、父親については、幼稚園が27%、保育所（園）が25%、母親については、幼稚園が19%、保育所（園）が18%視聴していることがわかる。幼稚園児と保育所（園）児の差はあまり見られなかった。
- 「3時間以上」と答えた割合は、変遷を平成12年度から22年度で比べてみると、父親が平成12年度16%、平成17年度20%、今回26%で10ポイント、母親が平成12年度14%、平成17年度18%、今回19%で5ポイント割合が増加しており、テレビを長時間見る子どもが増加傾向にあることが分かる。

2. 言葉のしつけと手伝い

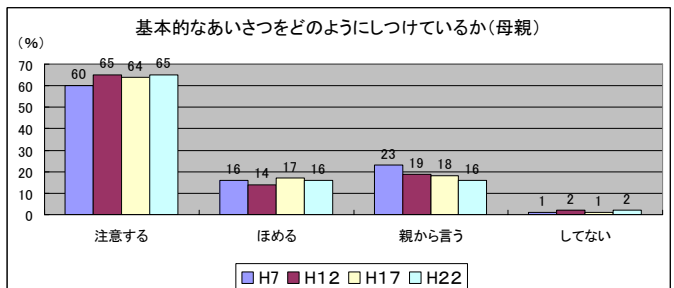
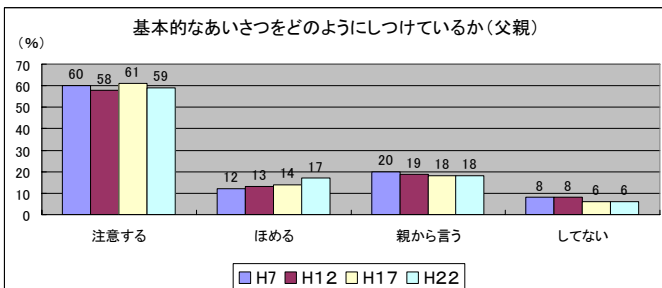
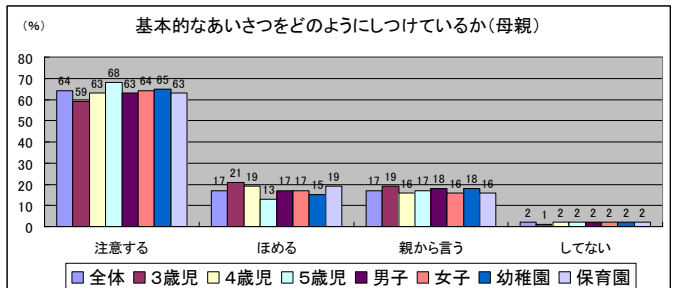
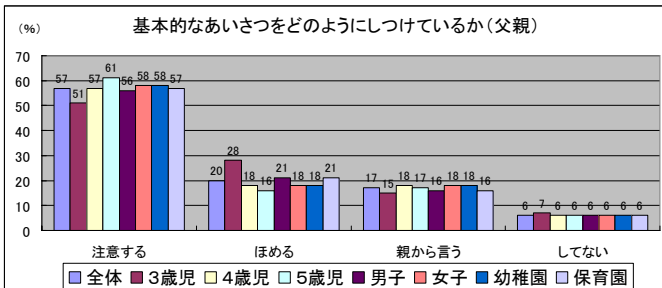
小学校等での校内暴力、特に子ども同士の暴力の増加は、自己表現やコミュニケーション能力の不十分さからくと指摘されている。民主的な社会を創っていくうえで言葉に関する学習は不可欠であり、言葉に関わる生活習慣は人間社会で生きる上で基本となるものであり、また、手伝いは家庭での役割や労働観の基礎をつくるものとして重要である。

(1) あいさつについて

人と人がかかわるきっかけをつくってくれるあいさつは、人間社会の礼儀であると共にコミュニケーションの基礎手段でもあり、生活習慣として身につけるべき重要なものと考えられる。

あなたは、お子さんに『はい』『ありがとう』『おはよう』などの基本的あいさつをどのようにしつけていますか

- 父母ともに「言わないときに注意する」と答えた割合が約6割と最も高くなっている。
- 「言わないときに注意する」回答を子どもの年齢別、男女別、幼稚園・保育所（園）別にみても、全体として「注意する」割合は約6割で15年間であまり変化はみられないが、父母ともに、子どもの年齢が上がるほど割合は高くなっている。
- 子どもが自然にそして主体的に学習していくことが大切であり、「言ったときにほめる」「親から言う」は各々2割足らずであるが、真似てあいさつをし、子どもはほめられ続けて行うことが多く、親が率先してあいさつする姿勢を見せたり、あいさつの気持ちよさや交流の楽しさを味合わせたりすることが基本となろう。

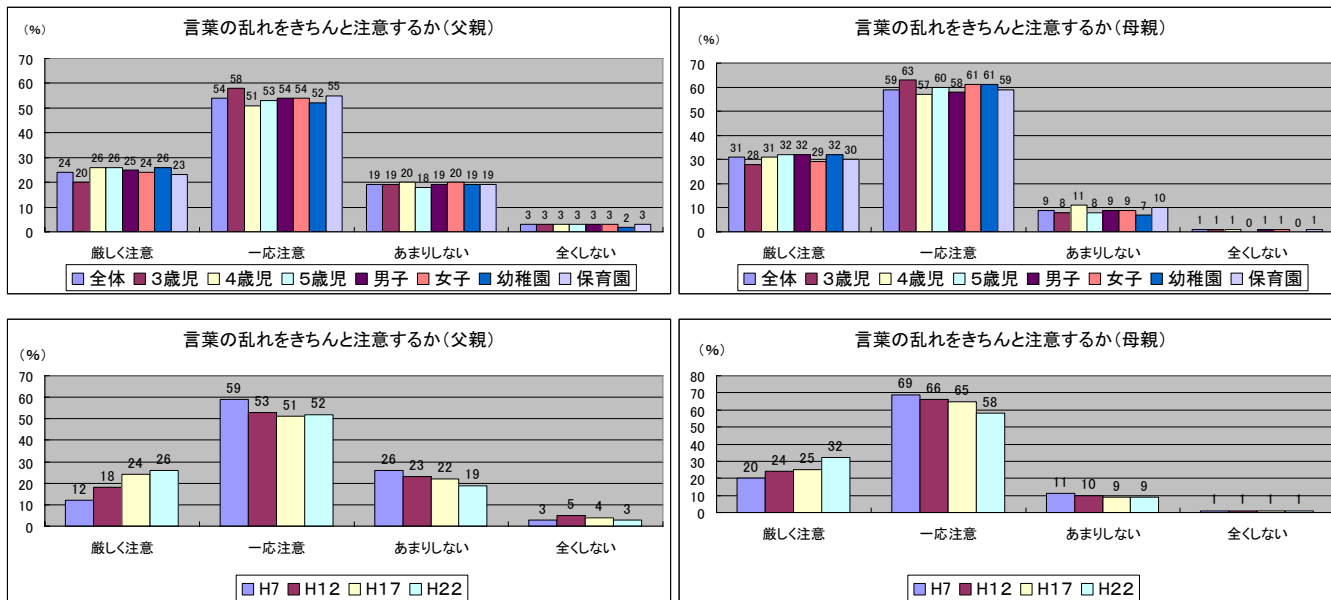


(2) 言語・流行語について

あなたは、お子さんの言葉の乱れや流行語の使用をきちんと注意していますか

- 父母ともに「一応注意している」と答えた割合が5割台で最も割合が高くなっている。
- ◎ 「厳しく注意する」と答えた父親の割合は平成7年度が12%、平成12年度が18%、平成17

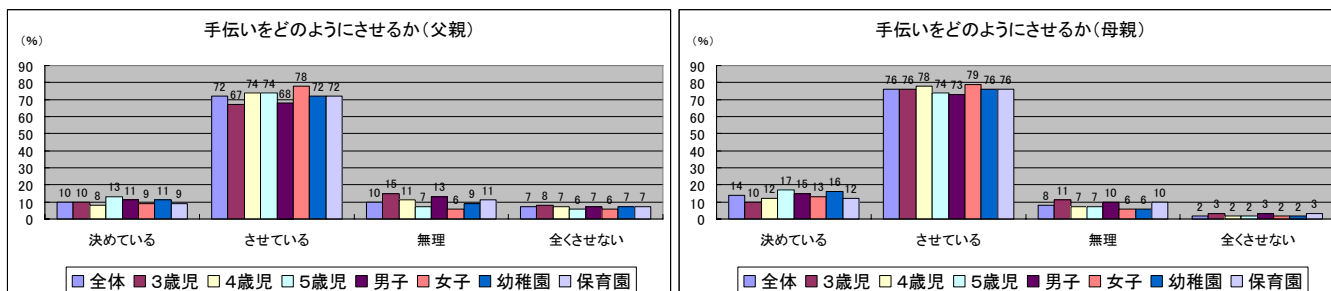
年度が24%、今回が26%と14ポイント、母親は平成7年度が20%、平成12年度が24%、平成17年度が25%、今回が32%と12ポイント増加しており、社会における言葉の乱れがひどすぎるのか、あるいは言葉を大切にしようとする意識の現れではないかと考えられる。しかし、実際の幼児の言葉使いを聞くと、暴言や乱れた言葉を使ったり、命を軽くみるような表現であったりと、メディア等の影響からか、親の意図するところとは異なる現状も垣間見られる。

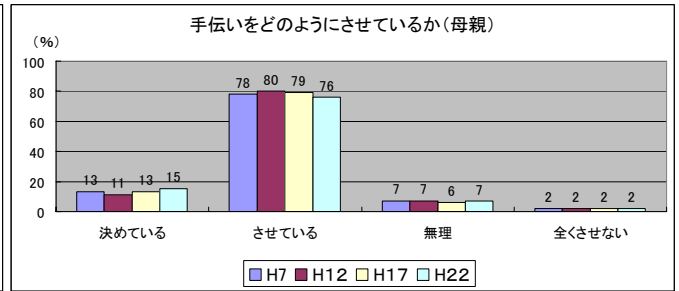
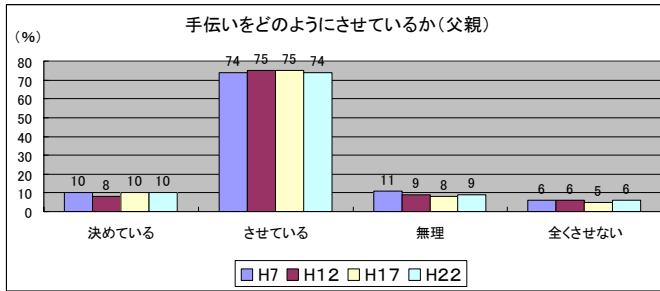


(3) 手伝いについて

あなたは、お子さんにどのようにお手伝いをさせていますか

- 父母ともに「特に決めていないがさせている」と答えた割合が7割台と最も高くなっている。
- 「特に決めていないがさせている」割合を子どもの年齢別、男女別、保育所(園)・幼稚園別に見てみる。父親については、3歳児は67%、4歳児は74%、5歳児は74%、男子は68%、女子は78%、幼稚園は72%、保育所(園)は72%となっている。母親については、3歳児は76%、4歳児は78%、5歳児は74%、男子は73%、女子は79%、幼稚園は76%、保育所(園)は76%となっている。
- ◎ 父親、母親はともに、ここ15年変わりが無い。「決めてさせている」割合は、ここ15年間約1割と変化はあまり見られない。「無理」「まったくさせていない」親への対応が必要であろう。





3. 「親の養育態度」に関するまとめ

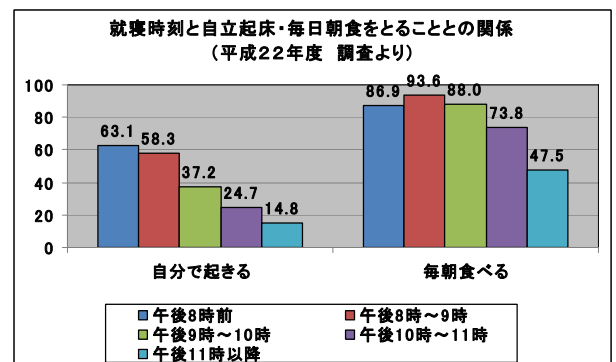
- 前回からの質問項目であるが、前回平成17年と同様に相変わらず9時前に寝ている幼児が3割に満たない。この実態は、「早寝早起き朝ご飯」の生活リズム改善の国民運動も、成果はまだまだといえる。親が本気で考え、早寝の重要性を深く理解する必要がある。就寝だけではなく、朝食摂取を除いて、「基本的生活習慣」に関しては、全体として生活習慣定着の重要性に対する認識が薄いといえよう。

- 【資料1、2】のように「就寝時間が遅い」ことと「朝食を食べない」「自立起床ができない」こととの関連性、「起床の仕方」と「毎日朝食をとること」の関連性も見られた。また、就寝時刻が早い子どもほど自分で起きる割合が高くなっている。同様に、就寝時刻が早い子どもほど毎日朝食をとる割合も高い傾向にある。前回は「自分で起きた」が、最も朝食率が高かったが、今回は人数が少ないとはいえ、「目覚ましで起きた」の割合が最も朝食率が高くなっていた。家庭環境にもよるが、たとえ幼児であっても、目覚ましを自分でかけてでも、確実に早起きしていくことも重要であろう。しかし、睡眠時間を確保するためには、やはり、親は午後9時には一度灯りを消して、寝かせる必要がある。

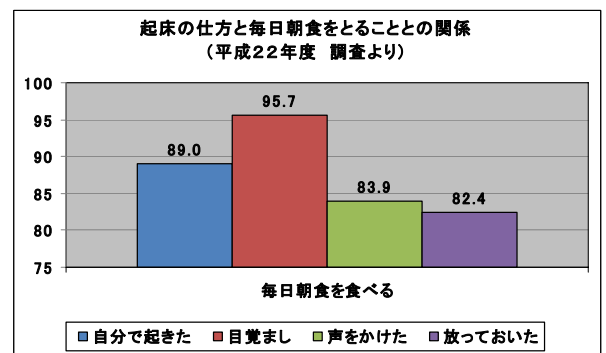
「早寝早起き朝ご飯」の生活習慣は、活発な活動や子どもの心身の成長・発達のためには最も大切にされなければならない。

- 父親の子育て参加が増加している中、子どもが自ら判断したり行動したりする前に、親が手取り足取り手伝っている傾向が強まっていると思われる。時間に追われているという要因もあろうが、子どもの自立のために教育するというよりも、子どもの生活の世話をしている傾向が強まっている。子どもの一生を考えていくと、子どもの発達に応じ、子ども自身が問題解決をしていく機会や子どもの生活活動その時の支援、支えが親には求められる。
- 幼児期の子どもを総合的にみていくと、子どもは家庭生活等を通じて自立性を少しずつ確立していく時期であり、親は幼児期の子どもにはつつい甘くなる。一方で、子どもが成長し思春期を迎えると神経質になったり、過干渉になったりする場合が多々ある。前回同様、今回の調査でも、テレビやゲームの接触時間が長くなるほど、「早寝早起き朝ご飯」が出来ていないという実態がみられた。また、「食事中にいつもテレビをみている」ほど、テレビの視聴時間が長くなる傾向にある。食事中に一度テ

【資料1】



【資料2】



テレビを消して、家族団らんの場にしてはどうであろうか。幼児においても、自分でテレビの内容や時間を選択して実行し、改善しながら、自己決定性を高めることが求められる。子どもは失敗することもあるということを前提として、親は子どもの態度や結果をみて、適時、できたことをほめることが大切であろう。しかし、しかられ、指導される権利もある。将来を見越して、基本的な生活習慣の形成を図る際には、子ども自身が体験したことを現実として認識し、次にどうしていくかを考えるための選択機会の提供や問題解決の材料を示していくことが重要である。

- 我が国の社会環境・現実生活の中で、親は、自分自身の生活や活動とも関係して、子どもを急がせがちである。しかし、子どもの一生涯を見通し、成熟した大人になるためには、子どもの発達段階に応じて形成させておかなければならないものは何かをもう一度考えておく必要があるだろう。
- 今後は、親自身の生活も、ゆとりを持って、早寝早起きが可能で、夜遅くに子どもに会えるのではなく、子どもに早くかかわれる社会環境を整える必要がある。特に、企業に対する、育児休暇取得の推奨だけでなく、育児期間の親に対する短時間勤務への工夫や子どもが病気の時に休めたり子どもに関わったりする事業参加を促進したりする柔軟な対応が求められよう。

男女共同参画社会を目指した取組が推進される中で、預かり保育、延長保育が多くの幼稚園・保育所（園）で実施されてきているという現状がみられる。社会全体が子育てに対する意識を深くし、子どものよりよい成長・発達のためには、どのような環境が必要かということを経済分野だけではなく、福祉、医療・保健、そして労働の分野からも総合して考え、実践していくことが不可欠である。特に、家庭環境が厳しい子どもに対しては、関係する各分野が焦点化して協働で取り組むことが必要である。

第3章 親子交流

1 子どもの認知

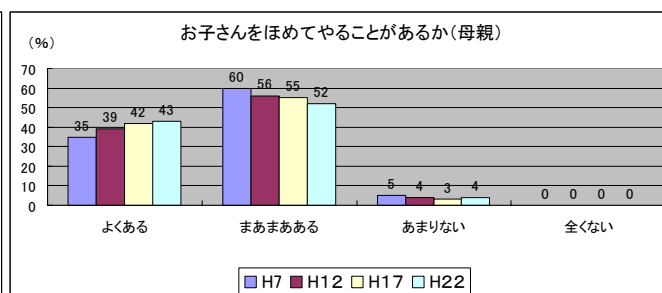
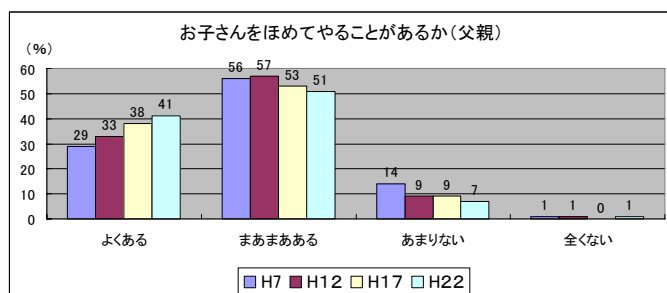
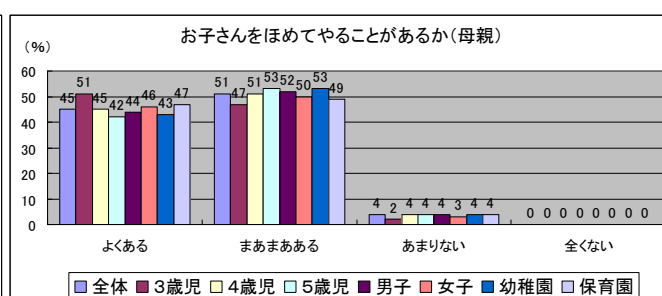
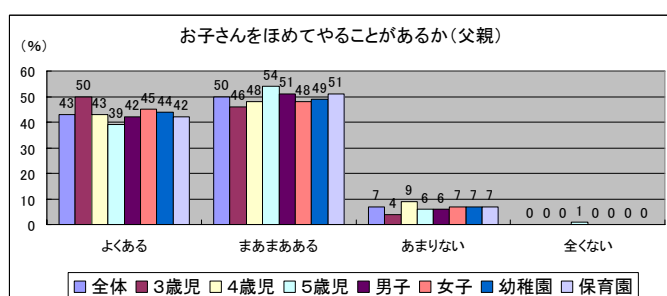
幼児期に親が子どもにどうかかわるかは、人間の一生において重要な位置を占めるといわれている。発達課題などのように、発達する上で一定の年齢段階において達成すべきといわれるものもある。しかし、それぞれの子どもには、成長・発達による変化や個性があり、どの子にも一様に適する子育てなど存在しないであろう。乳幼児は、愛情深い親の関わりで直接触れることで、愛着関係が形成され、安心して外の世界に向かうことができるものである。

子どもとの関わりや意識の実態を親がどのようにとらえているのかを、「ほめる」「しかる」「男女の区別」という3つの設問から考えてみる。

(1) ほめること

あなたは、お子さんをほめてやることがありますか

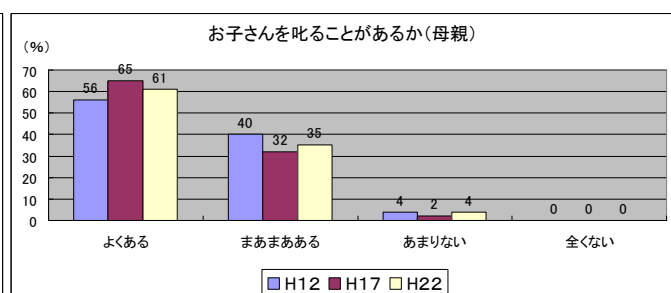
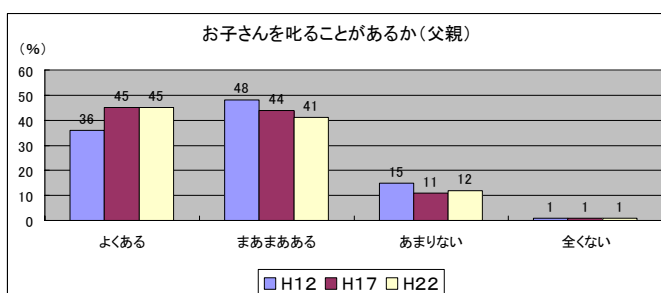
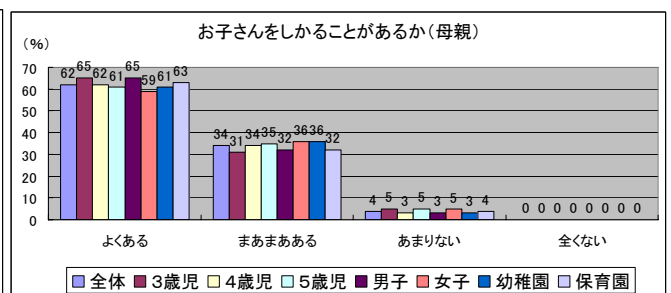
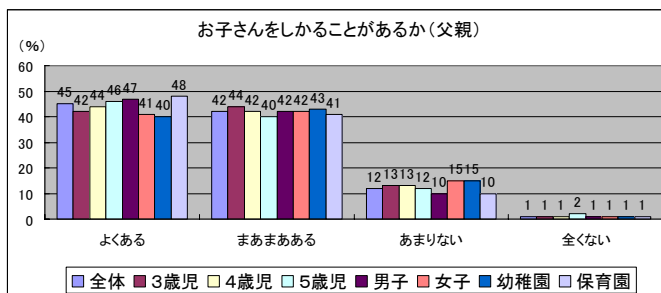
- 「よくある」「まあまあある」と回答した父親は合わせて93%、母親は96%であり、父母ともに大半の親が子どものよいところを認めようとする姿勢をもっていることがわかる。
- 「よくある」（父親43%、母親45%）のみで比較してみると、平成7年度から着実に上昇し、父親で12ポイント、母親で8ポイント割合が高くなっている。また、父親は、5歳児より3歳児の方が11ポイント高く、母親では、3歳児は4歳より6ポイント、5歳より9ポイント高くなっている。
- ◎ 経年比較において、父親は、「よくある」が平成7年度の29%から、平成12年度の33%、平成17年度の38%を経て、今回の41%へと増加しており、「まあまあある」を含めても確実に増加している。
- 母親は、「よくある」「まあまあある」の合計では、天井効果によるのか年度間に変化は認められない。しかし「よくある」の割合は平成7年度から今回は8ポイント増加している。自尊感情の向上や、ほめることによる積極性の増大など、ほめることの重要性が啓発や教育によって知られることが多くなったことや雑誌等でも示されたことが要因としてあげられよう。



(2) しかることについて

あなたは、お子さんをしかることがありますか

- 日常的に接する機会が多いこともあってか、「よくある」と答えた父親は45%、母親は62%である。「まあまあある」と答えた父親は42%、母親が34%、また「あまりない」「全くない」を合わせると、父親13%、母親4%である。この場合、かなりの割合でみられる「まあまあある」という対応がどのようなものか明確ではないが、マナーやモラルに関する意識があいまいになっている親も少なくないのではと懸念される。
- 子どもの年齢別や男女、幼稚園・保育所（園）での比較において母親には差がみられないものの、「よくある」と答えた父親は保育所（園）児は48%で、幼稚園児の方の40%と8ポイントの差が出ている。これらの差は、マナーに関する意識の高さの違いというよりも、幼稚園児より保育所（園）児を持つ父親の方が、忙しいために寄り添うのではなくつついしかったり、母親が忙しい中で子どもの問題行動を目の当たりにする実感が強いことによるものではないかと推測される。
- ◎ 「よくある」と答えた割合は、平成12年度は父親36%、母親56%から、平成17年度は、父親45%、母親65%に父母ともに9ポイント上昇したが、今回は、父親は45%で前回から変化はなく、母親は61%で前回から4ポイントの減少が見られた。



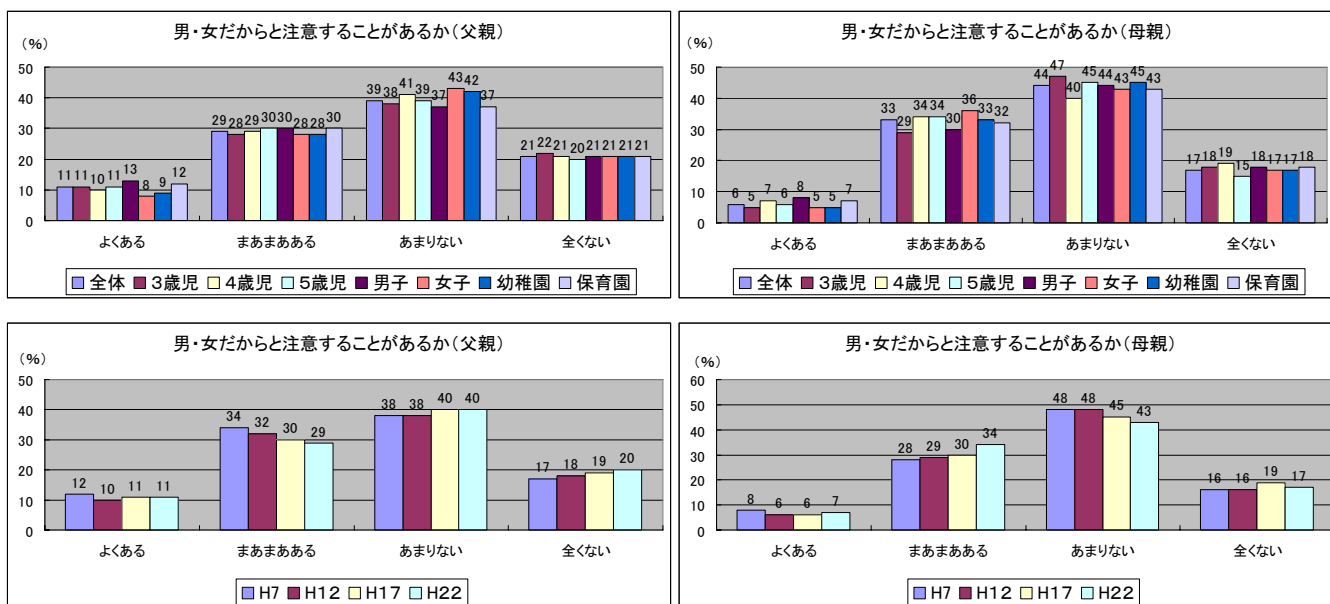
(3) 男女を区別した子育てについて

あなたは、お子さんを『男の子だから』『女の子だから』と注意したりしかったりすることがありますか

- 「よくある」「まあまあある」と回答した割合を子どもの男女別で比べてみると、男子の父親では、43%、女子の父親では36%と7ポイントの開きがあり、前回同様、父親は同性の男子へより強い性役割の期待を持つことがうかがえる。
- 「よくある」「まあまあある」と回答した父親は40%、母親は39%である。経年で比較すると、父親は減少しているが、母親は増加しており、父母の割合がここ15年で近づいてきているという実態

があった。これらの割合は子どもの年齢別にみてもほとんど差はみられなかった。

- ◎ 「よくある」「まあまあある」と回答した父親は平成7年度の46%より、6ポイント下がっている。母親については、平成7年度の36%から、5ポイント下がった41%となっていた。



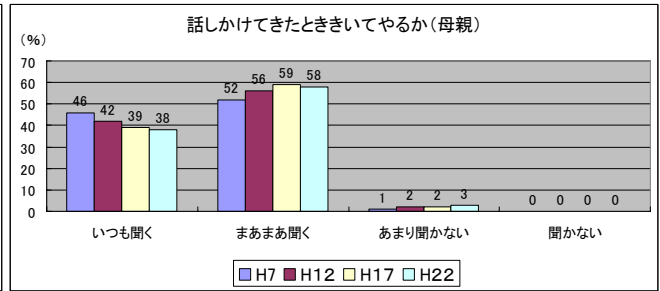
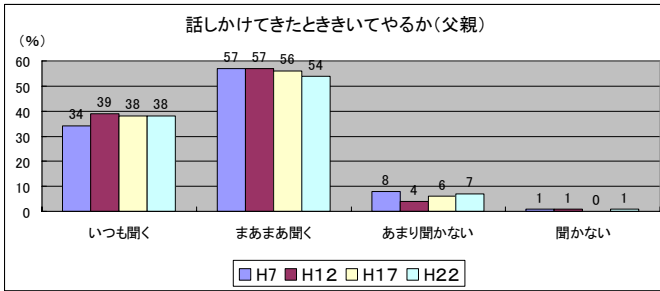
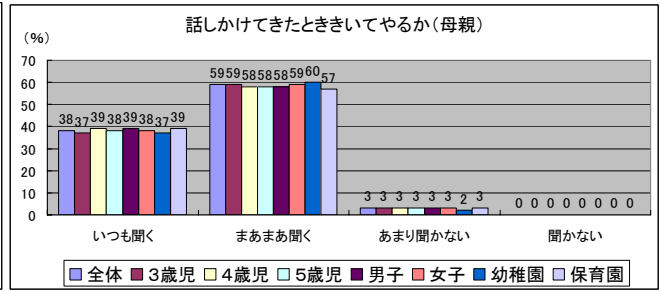
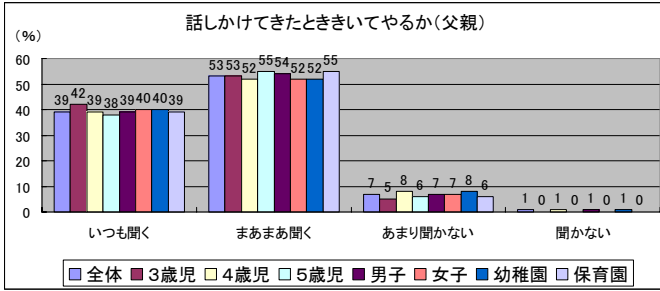
2 子どもの受容

親による共感的な受容はまずもって重要である。人は他者に受容されることによって、自信を持ち自己の成長を遂げていくことができる。特に乳幼児は、愛情深い親の受容や関わりに直接接触することで、安心して外の世界に向かうことができるものである。親が子どもをどのように受容しているのかを、「対話」「スキンシップ」という2つの設問から考えてみる。

(1) 対話について

あなたは、子どもが『なに？どうして？』とたずねてきたり、話しかけたりしてきたとき、話を聞いていますか？

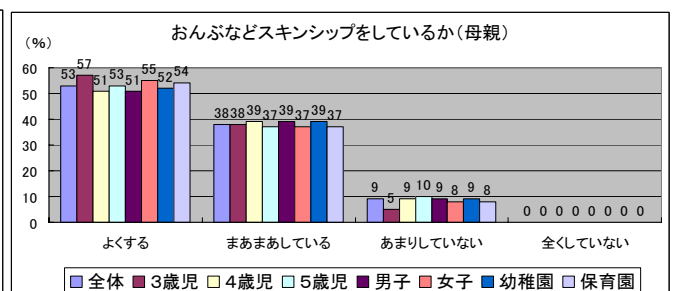
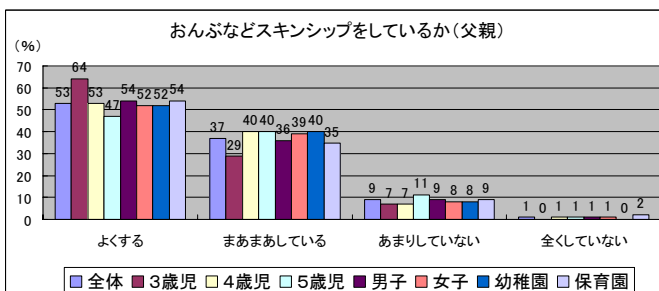
- 「いつも聞いている」「まあまあ聞いている」と回答したのは、父親が合わせて92%、母親が97%である。その中で「いつも聞く」は父親39%、母親38%、「まあまあ聞く」が父親53%、母親59%、さらに「あまり聞かない」が父親7%、母親3%である。それらの割合は、子どもの年齢、男女、幼稚園・保育所（園）においてもほとんど差異はなく、大半の親は、子どもの年齢、男女、幼稚園・保育所（園）を問わず、ある程度子どもからの話かけに耳を傾けているようである。
- 過半数を占める「まあまあ聞く」がどの程度の頻度で、どのような聞き方をしているかは、個々人の判断に委ねられているため、その点には留意が必要であろう。
- ◎ 経年比較では、「いつも聞く」母親が平成7年度46%、平成12年度42%、平成17年度39%、今回38%と減少していることがわかり、じっくりと子どもに向かいあう母親が近年少なくなっているのではと懸念される。多忙化がいわれるなか、「いつもきく」傾聴の姿勢は、子育てにおいて今後ますます不可欠であろう。
- ◎ 共感的に受容し、相互に認め合い、直接の体感的相互作用を行う中で、子どもの主体性を引き出し、ていくような対話がなされているかももう一度考えていく必要が有ろう。

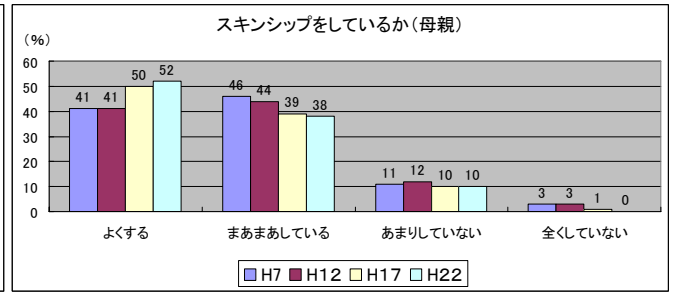
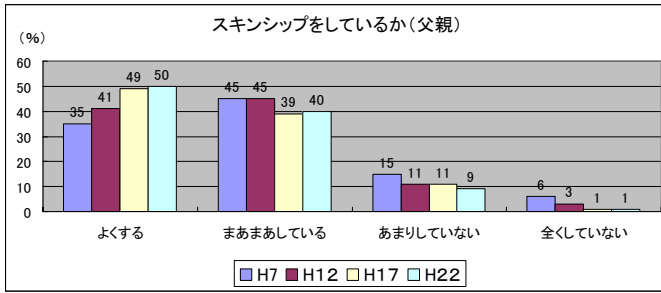


(2) スキンシップについて

あなたは、お子さんとおんぶやだっこでスキンシップをしていますか

- 「よくする」「まあまあしている」と回答した父親は90%、母親が91%である。子どもの年齢別にみると、幼い3歳児が父母ともに最も高い割合を示しているのは自然なことであろうが、4・5歳児にも不可欠である。
- 男女別、幼稚園・保育所(園)による差異はほとんどみられない。
- ◎ 「よくする」「まあまあしている」の経年比較をみると、父親は平成7年度80%、平成12年度86%、平成17年度88%、今回90%と増加している。中でも「よくしている」は、15年前の35%から、今回50%へと、15ポイントのめざましい伸びである。母親の方も「よくする」は15年間で11ポイント増加し、今回52%である。スキンシップやアタッチメントの重要性に関する啓発・教育が進められた成果であろう。
- ◎ 「よくする」は、父と母の間で15年前には6ポイントの開きがあったのに対して、今回は2ポイントと、その差が縮まっているところが興味深い。核家族化・少子化の中でスキンシップを大切にしている父親の姿が見えるが、このスキンシップという親子の交流を地域活動や異年齢・異世代交流へと家庭外の世界に拡充していくことが求められよう。

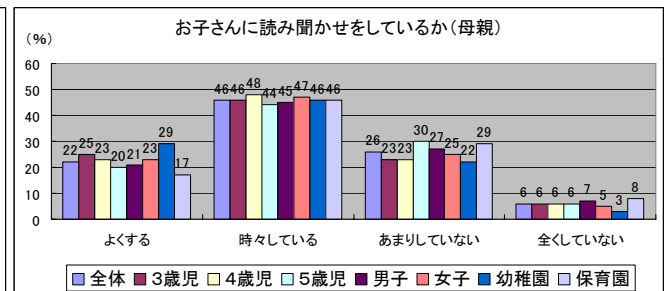
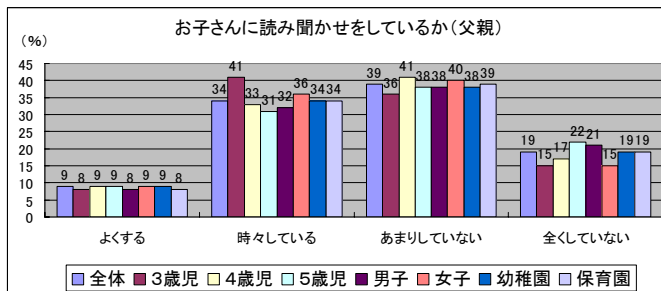




(3) 読み聞かせについて

あなたは、お子さんに読み聞かせをしていますか

- 「よくする」「時々している」と回答した父親は43%、母親は68%で、「あまりしていない」「全くしていない」と回答した父親は58%、母親は32%と、母親に比べて父親が著しく読み聞かせをしていないことが分かる。
- 男女による差異はほとんど見られない。
- 「よくする」と回答した母親は、幼稚園29%、保育所(園)17%で、幼稚園の方が12ポイント高かった。



3 「親子の交流」に関するまとめ

幼児期は人間関係の基礎をつくる時期である。人は幼い時期には自立して生きていくことは難しく、どの動物よりも、ゆっくりと長い年月をかけて大人になっていくといわれている。その間に、人との付き合い方を学び、社会化を促し、自立に必要な学びを支えるのは、様々な人との出会いであり、そこに形成される多様で重層的な人間関係である。人生の初期において最も重要な人間関係は、なんといってもまずは乳児期の養育者への愛着の成立である。続く幼児期では果敢に外界へ挑戦し、自己を発揮する経験を蓄えながら成長していくのであるが、それを支えるのも、やはり身近に信頼できる大人の安全基地的存在である。このように信頼を基本とする人間関係は、日頃の愛情深い触れ合いの中で形成されるものであり、家庭においては親子の交流がその基本となる。

そのことについて、「子どもの認知」と「子どもの受容」という2つの側面から考察する。

(1) 「子どもの認知」からいえること

- ◎ 父親は15年前に比べると、子どもと関わる割合が全体的に増加しており、父親なりに子どもへの関心と肯定的な関わりが高まっている。それには間接的に、子育てに望ましい行為が父母の間で話題となっていることも考えられる。
- 現実的な子育て状況の中での父親の育児参加は、子育てを軸とした親子間、夫婦間の交流を生み、

家庭内の受容的な雰囲気醸成することにつながるであろう。しかし、逆に、夫婦の葛藤や意見不一致の場合の対応も考えておく必要がある。

(2) 「子どもの受容」からいえること

- メディア等で育児不安や児童虐待がセンセーショナルに取り上げられることも多々あるが、全体としては、親は子どもを受容している、あるいは受容しようとしているという姿が浮かび上がった実態調査結果であった。受容に関する問いでは、父母共に9割以上が子どもからの話しかけに応じたり、スキンシップをしていると答えている。しかし、受容できていない親も少ないながらも存在し、子どもよりよい成長・発達にとって大きな課題であるといえる。その環境や程度には個人差があることであり、日常の忙しさの中で、求めてくる子どもに「ちょっと待ってて」と言わざるをえない時もあるであろう。その分できるときには、しっかりと向き合い、温かな親子の交流を質的に深めていきたいものである。
- 読み聞かせに関しては、最近では学力との関係で、その良さが取りざたされることが多い。しかし、読み聞かせは、親子の交流の場であり、子どもの豊かな感性や情操を育む大切な時間でもある。このため、公立の図書館が幼稚園・保育所（園）と連携・協力し、読み聞かせの家庭での拡充を図る工夫が、今後さらに重要となってくる。そのことが、テレビやゲームの長時間化にも歯止めをかけることにもつながるであろう。

第4章 養育意識

1. 養育の目標と家庭外の教育

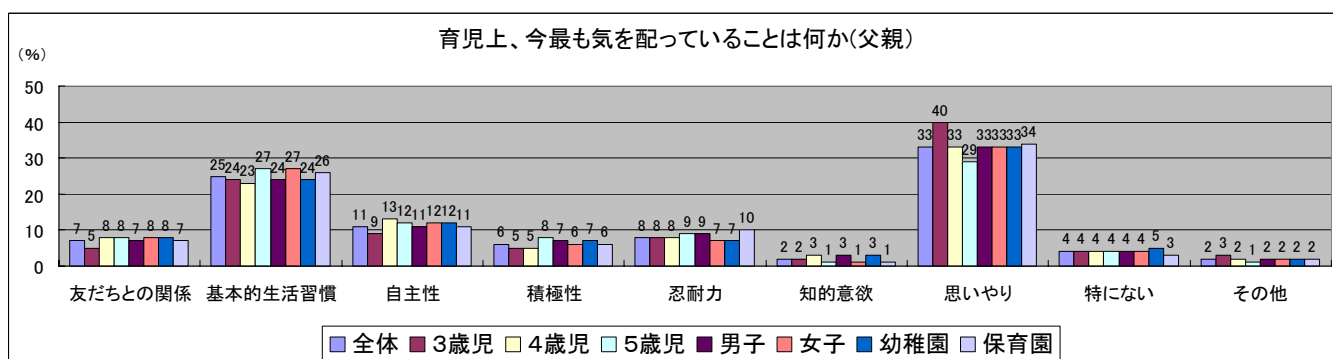
子育てにおいても価値観が多様化する中、基本的な子育てのあり方が見えにくくなってきているといわれる。子どもを育てる上で留意していること、学ばせたいことの背景には、「このような子どもに育ててほしい」という親の期待像が描かれている。

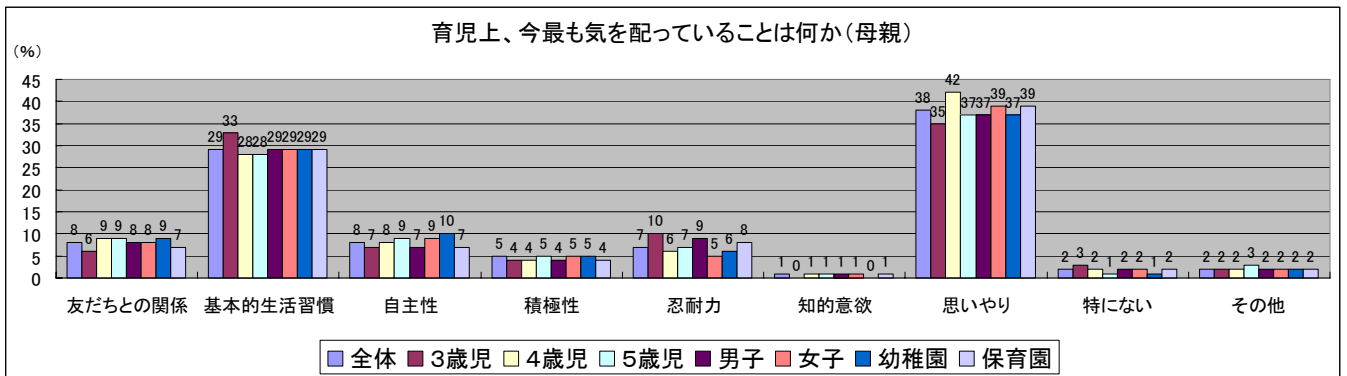
それらの養育上の目標に対する意識、そして家庭外の教育を、「育てる上での重点」「習い事」の2つの設問から考える。

(1) 育てる上での重点について

あなたが、お子さんを育てる上で、今、最も気を配っていることは、次のうちのどれですか

- 父母共に最も多かったのは、前回・前々回と同様、「思いやり」（父親33%、母親38%）、次に「生活習慣」、3番目に「自主性」「友達関係」となっている。
- 1位の「思いやり」と2位の「生活習慣」との差は、父親で8ポイント、母親は9ポイントと大きく開いている。これらの傾向は平成17年度の調査結果でも同じである。
- 約4割の親が習い事に通わせている現状の中で「知的意欲」は父親2%、母親1%と前回同様、最も回答の割合は低い。
- ◎ 4・5歳のみデータをみると、今回の調査では、3・4・5歳を合わせたものと順位は変わっていないが、平成7年度は父親の1位が「生活習慣」、2位「自主性」、3位「思いやり」であった。母親は、「生活習慣」と「思いやり」が29%で同率1位、3位が16%の「自主性」であった。平成12年度から両親ともに「思いやり」が1位となって続けている。
- ◎ この結果が示す15年間の変化は、複雑な現代社会において、子どもの人間関係づくり能力が低下していること、親も含め多くの大人が人間関係に戸惑っていることの裏返しとも考えられる。
- ◎ 「生活習慣」の順位が下がっているのは、ある程度、基本的な生活習慣に関しては取組がなされ定着してきていると考えられる。しかし一方で、基本的な生活習慣の確立が幼児期の重要な発達課題であるにもかかわらず、家庭でなすべき取組が幼稚園・保育所（園）任せになり、年々おろそかになる傾向が見られるという保育現場からの訴えを踏まえておく必要がある。まず、親との信頼関係の構築が求められよう。
- ◎ 日本の子どもの孤立化が叫ばれる中、意図的な子どもの人間関係づくり能力の育成とともに、肝心な時に支えとなる親の人間関係を多面的に育む取組が求められよう。

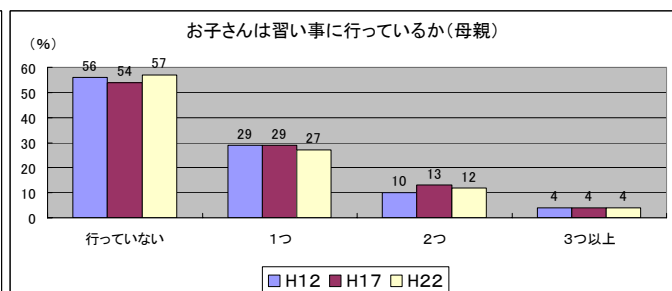
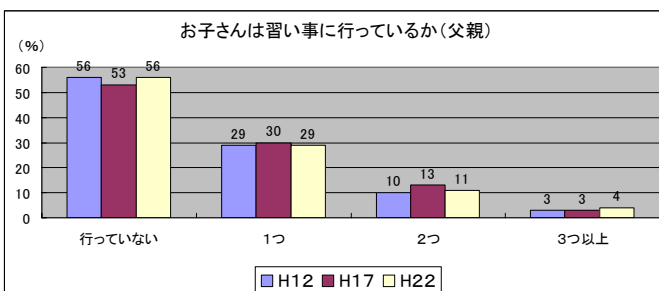
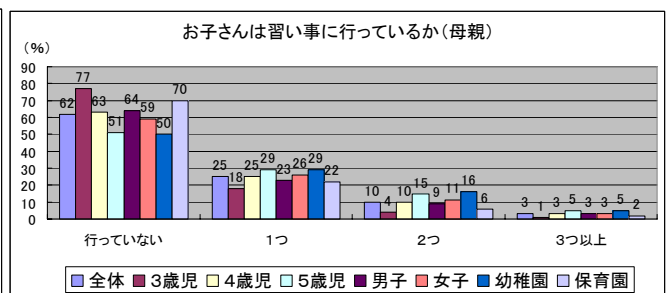
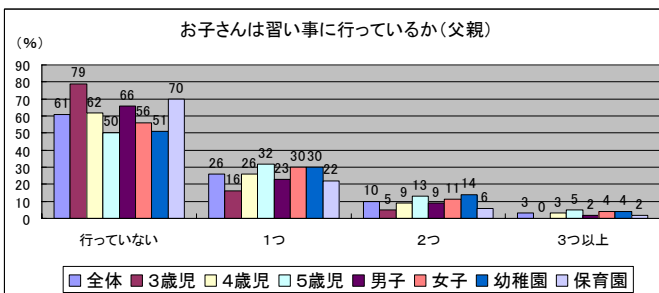




(2) 習い事について

お子さんは習い事に行っていますか

- 母親のデータで子どもの年齢別に見ると、「行っていない」が3歳児で77%であったのが、5歳児で51%になり、年長児の約半数が何らかの習い事をしていることになる。(以下も母親のデータ)
- 習い事の数を5歳児で見ると「1つ」が29%、「2つ」が15%である。また「3つ以上」が5%あり、この場合は一日1つの習い事に行くとしても、週の半分は習い事に行っていることになる。
- 男女別では、少なくとも1つ以上習い事をしている男子が35%（「1つ」「2つ」「3つ以上」の合計）で、女子の方が40%と、若干多い。これは外で元気に遊ぶことと、ピアノなどの技能を身につけることへの期待が男女で多少違うことによるのではないかと考えられる。
- 幼稚園児で習い事に行っているのは50%、保育所（園）児は30%である。この20ポイントの開きが意味するところは、働いている親にとって、1つは習い事への送迎時間確保の難しさを示しており、習い事への関心が薄いというものではないであろう。ちなみに近年、幼稚園・保育所（園）でも、知的な面での学力を重視したり、保育時間内に英会話やスイミングの教室を開設したりしているところの人气が高いようである。
- ◎ 子どもの行っている習い事の数の割合は、全体的に父母共に回答はほぼ同じである。下図のように、ここ10年ではあまり変化がみられない。



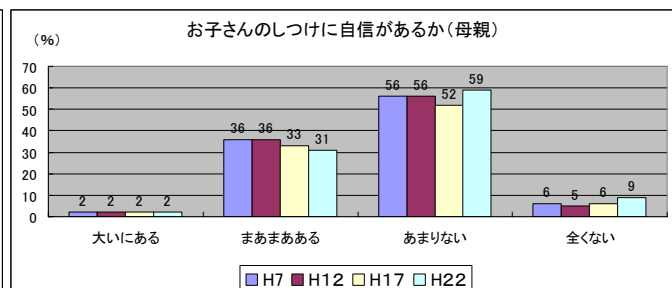
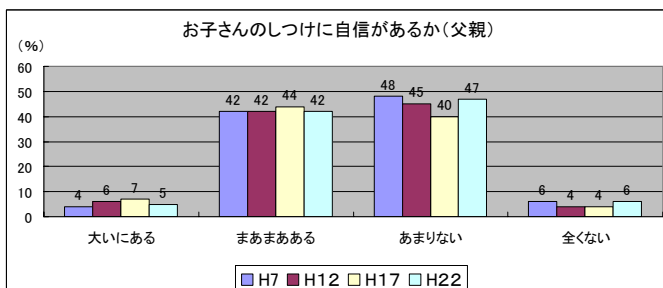
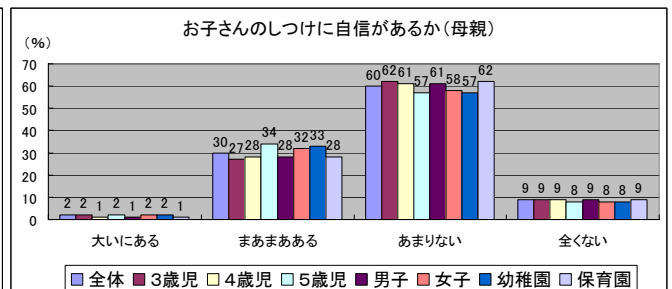
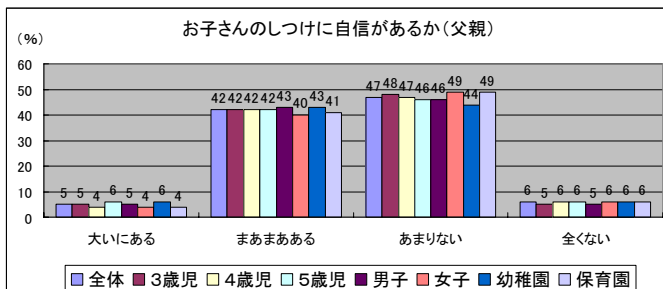
2 自己評価

親が家庭教育について自分自身をどう評価しているのかということは、親のニーズ把握という点からも今後の家庭教育施策を考えていくうえで重要である。「子育ては親育て」とよく言われるが、思い通りにならない子どもを前にして、親は日々自分の子育てを振り返ることになる。その試行錯誤の中で、親は親となり、親も子ども成長の軌跡を踏んでいくものであろう。親として子育てに関わる自分のあり方をどのように意識しているのか、「しつけの自信」「しつけの甘さ」の2つの設問から考える。

(1) しつけの自信について

あなたは、お子さんのしつけに自信がありますか

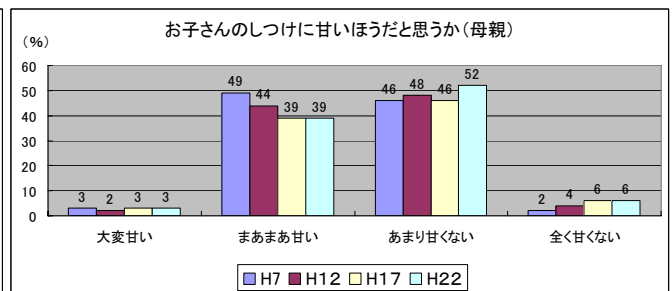
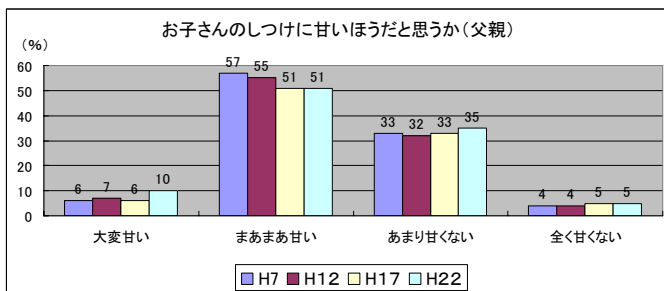
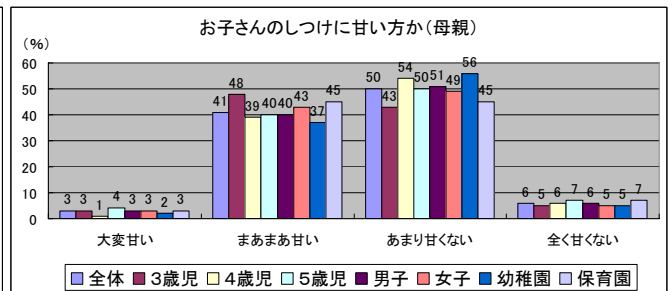
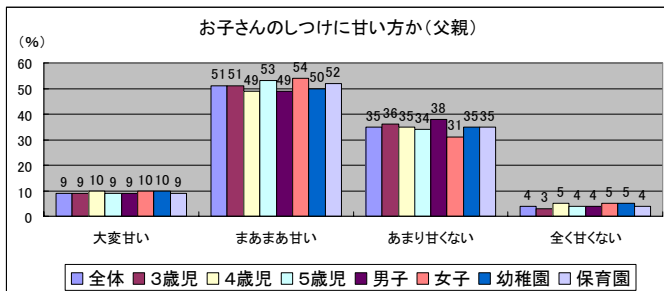
- しつけに自信のある（「大いにある」「まあまあある」の合計、以下同）と回答した父親は約47%、母親はそれより15ポイント下がって32%である。
- 「しつけに自信のある」は、子どもの年齢、男女、幼稚園・保育所（園）による比較において、父親には差がみられない。母親は3・4歳児よりも5歳児は7ポイント高くなり、子育ての経験年数が多少なりとも自信につながっていると思われる。
- 保育所（園）児の母親は、幼稚園児の母親よりも6ポイント低い値である。本来、幼児期のしつけはかなりの根気と時間を要するものであり、仕事をしながら、そこに十分関われないという引け目や現実的な悩みが、母親の自己評価にも影響していると思われる。
- ◎ 経年比較によると、「しつけに自信のある」母親が、平成7年度は38%であったのに対し、今回の調査では33%に減少している。この減少が意味するところは、母親自身が子ども時代から乳幼児に関わる経験が乏しかったり、少子高齢・核家族社会の中で、育児不安を抱え孤立化したりしている母親の増加が影響しているのではないかと考えられる。特に増加してきている「まったく自信がない」1割近くの親への対応が緊要である。



(2) しつけの甘さについて

あなたは、お子さんのしつけに甘い方ですか

- 「大変甘い方だと思う」「まあまあ甘い方だと思う」と回答した父親は合わせて60%、母親は44%であり、過半数の父親が子どもに甘いと自覚している。
- 「しつけに甘い」（「大変甘い」「まあまあ甘い」の合計）と自覚している保育所（園）の母親は48%で、幼稚園の母親の39%よりも9ポイント高くなっている。子どもと接する時間の少ない保育所（園）の母親の方が、子どもにより甘いという傾向が読み取れる。
- ◎ 平成7年度と今回のデータで比較すると、15年間でしつけに甘い（「大変甘い」と「まあまあ甘い」の合計）父親は2ポイント、母親は10ポイント減少している。



3 養育の悩みや課題

親は家庭教育の中で、様々な悩みに出会う。子育てにおいては悩みがあっても当然である。悩みながら、わが子の成長に見合った働きかけや環境を整えることは、養育上とても大切なことである。しかし多様な情報や価値観とともにめまぐるしく変化する現代社会の中で、悩みの本質や背景を探り、それがどのようなものであるかを見極め、実際に取組むことには、かなりの負担やストレスが伴うであろう。

また、親が自分自身の考えにこだわり過ぎて、期待する子ども像と目の前の子どもの姿が一致しない場合や、親自身にその年代の発達課題が重くのしかかっている場合には、それらが子育ての悩みを、よりいっそう浮き立たせることになるであろう。

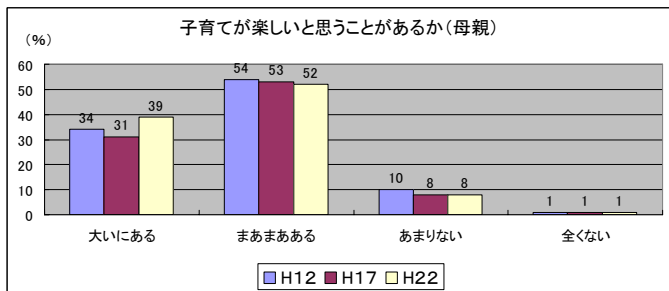
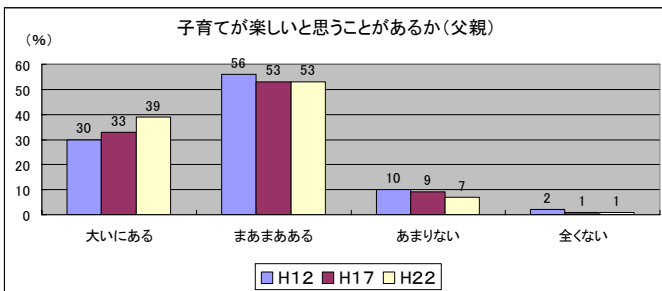
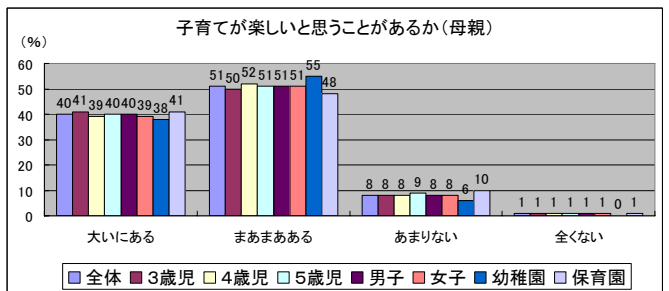
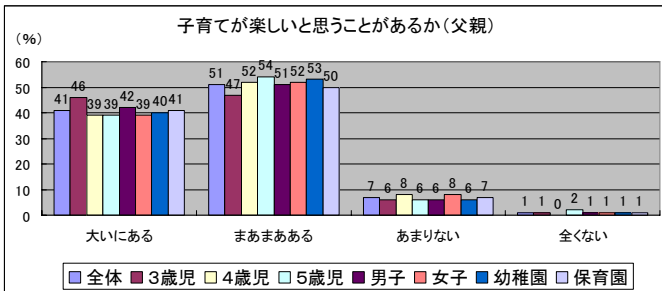
さらにここ数年、子どもをめぐる犯罪が多発し、安心して子育てできない環境や子どもの心の成長にも不安を抱く親は少なくない。また、こういった悩みなどに対し、今後、対応する手だてを講じる必要がある。

養育上の悩みや課題の実態について、「子育ての楽しさ」「子育ての孤立感」「イライラする気持ち」「子どもに関する悩み」「子育てに関する悩み」「悩みの解決法」「望んでいる子育て支援」の7つの設問から考えてみる。

(1) 子育ての楽しさについて

あなたは、子育てが楽しいと思うことがありますか

- 「大いにある」「まあまあある」と回答した父親は92%、母親が91%、また「大いにある」が父親41%、母親40%である。これらの割合は子どもの男女別や、幼稚園・保育所（園）間でもほとんど変わらない。大半の親は楽しいと感じられることがあるというのが実態である。しかし、逆に感じられない1割近くへの対応が子どものよりよい成長・発達の視点からも求められよう。
- 子どもの年齢でみると4・5歳児に比べて、3歳児の父親は「大いにある」の回答者が7ポイント高くなっている。
- 調査から「孤立感」「イライラ感」との関連性が示されており、楽しくするための取組みが求められる。「楽しくない」と意識している親への留意が「孤立感」や「イライラ感」の面からも必要である。
- ◎ 平成12年度と今回のデータを比較すると、10年間で「大いにある」と回答した父親は9ポイント増加し、母親は5ポイント増加している。子育て支援の充実など、楽しめる環境づくりが若干でも増えてきていることが推測される。

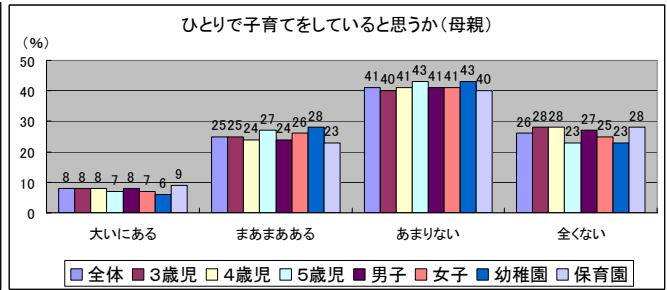
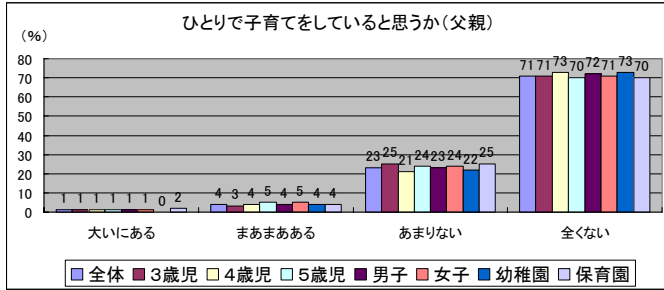


(2) 子育ての孤立感について

あなたは、自分ひとりで子育てをしていると思うことがありますか

- 「大いにある」「まあまあある」と回答した父親は5%、母親は33%である。この28ポイントの開きが示すように、父親の育児参加が進展してきたとはいえ、まだまだ母親の方にその負担が偏っているのが現状であろう。
- これらの割合は、父母ともに子どもの年齢や男女別、幼稚園・保育所（園）による比較においても大きな違いはみられない。
- ◎ 平成12年度の調査と比較すると、「大いにある」と「まあまあある」を合わせた割合は、12年

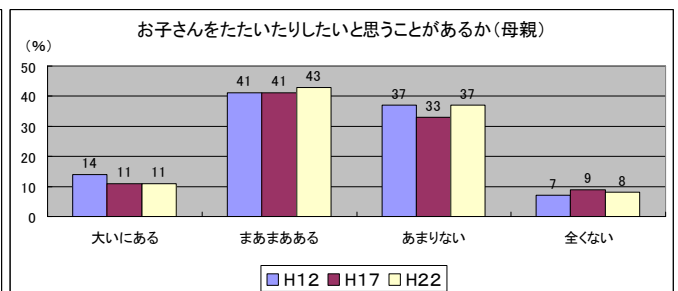
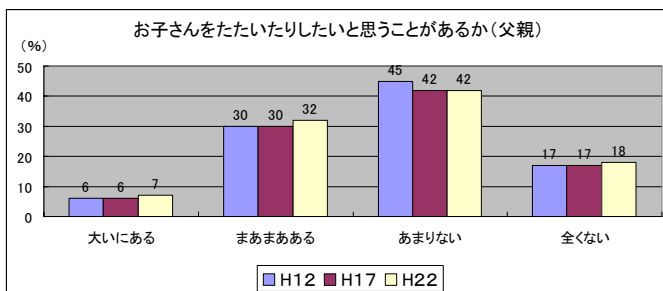
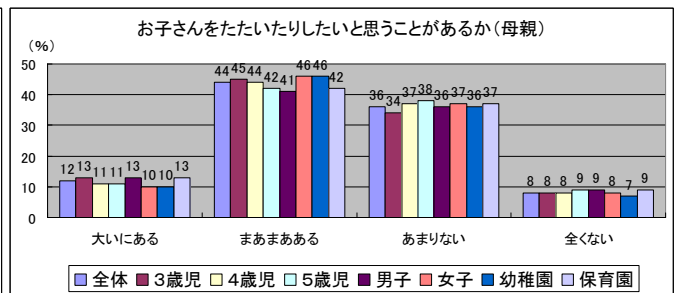
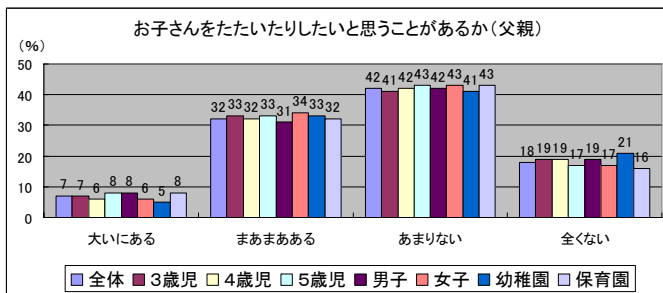
度は父親3%、母親40%であり、今回は父親5%、母親33%であり、父母間での差がこの10年間で多少なりとも縮まっている。一方、逆の視点から、ひとりで子育てしていると思うことが「あまりない」「全くない」という回答をみても、12年度より今回の調査で母親に8ポイントの増加がみられた。この増加は、母親の孤立感が緩和されてきたものと考えられる。



(3) イライラ感について

あなたは、子育てにおいてイライラしたりして、お子さんをたたいたりしたいと思うことがどの程度ありますか

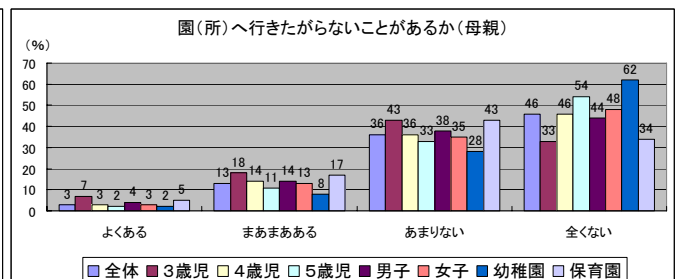
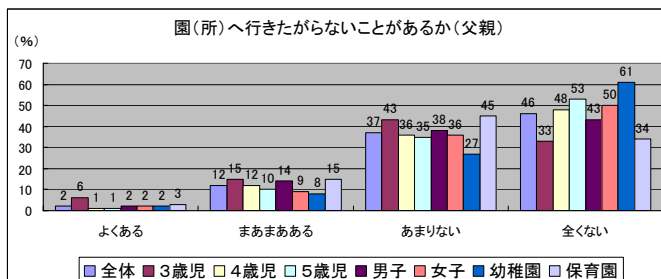
- 「よくある」「まあまあある」という父親は39%、母親は56%で半数以上にのぼる。その中で「よくある」という母親は12%、すなわち1割以上の母親が、虐待にもつながるようなイライラ感に度々襲われていることになる。
- 子どもの年齢を見ると、3歳児の母親は5歳児より3ポイント高くなっている。これはやはり、3歳児が多くの手助けを必要としながらも、活発な自己主張をくりひろげるために、しつける側の親もその対処に精神的なエネルギーを消耗しやすいということかもしれない。
- 平成12年度からの10年間で大きな違いは見られなかった。このイライラ意識への解決策を講じることが子どもにとっても重要である。



(5) 不登園（所）について

子どもが園（所）へ行きたがらないことがありますか

- 子どもが園（所）へ行きたがらない数の割合は、全体的に父母共にほぼ同じである。
- 「よくある」「まあまあある」と回答した父親は合わせて14%、母親は16%であり、「あまりない」「まったくない」と回答した父親は合わせて83%、母親は82%であった。大半の子どもは園（所）に行きたがらないことはないが、約1.5割の子どもは不登園（所）の可能性があるとわかる。
- 「よくある」「まあまあある」と回答した3歳児の父親は21%、母親は25%で、父母ともに4・5歳児より8ポイント以上高くなっている。3歳児は他人とともに活動することに慣れていなかったり、長時間である場合寂しがったりと、親の助けを多面的に必要とし、集団生活の体験を始めるこの時期、園（所）へ行きたがらない割合が高いと考えられる。
- 幼稚園・保育所（園）での比較では、「よくある」「まあまあある」と回答した保育所（園）の父親は18%で、幼稚園の10%より8ポイント高かった。保育所（園）の母親は22%で、幼稚園の10%より12ポイント高かった。保育所（園）児の方が園（所）へ行きたがらない割合が高いことがわかる。親と一緒に居る時間の短い保育所（園）児ほど、親とできるだけ一緒に居たいと思うこともあろう。



(6) 悩みの解決法について

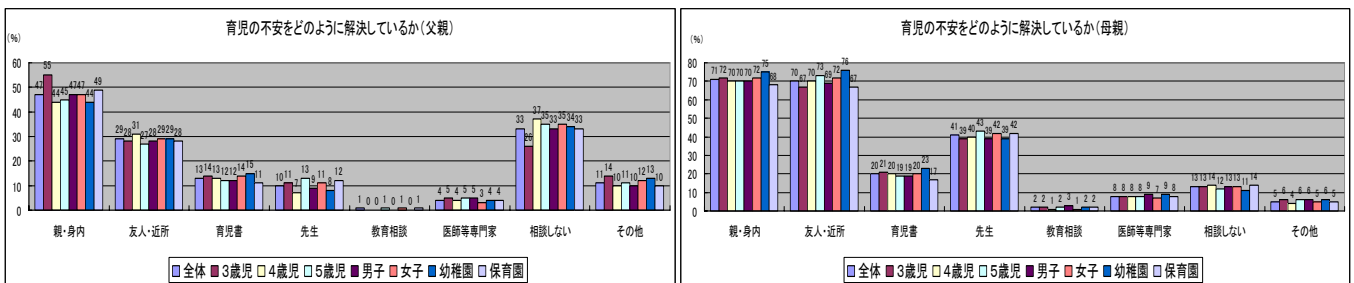
育児の不安をどのように解決していますか

- 育児で困ったり不安に感じたことを解決する方法として、父親で最も多いのが「親などの身内」47%、2番目に「相談しない」33%である。
- 母親は一番が同じく「親などの身内」の71%であるものの、わずか1ポイント下がるだけで「友人・近所」が2番目に続いている点が父親とは対照的である。
- このように父母ともに身内を一番の相談相手に位置づけているが、それ以外は自分の判断で解決しようとする父親に対して、母親は身内以外でも子育ての悩みを友だちや近所づきあいの中で、気負いなく話したり、励まされたりという関係をつくりやすいものと思われる。
- 父親の1、2番の順位は子どもの年齢や男女別で見てもほとんど変わらない。しかし母親の方は5歳児で1位と2位が入れ替わっている。
- 保育所（園）児の母親は1位の「身内」68%で、2位の「友人・近所」より1ポイント上回っているのに対して、幼稚園児の母親では、「身内」が75%で、割合的には保育所（園）児の母親とあま

り変わらないものの、その順位が逆転し、「友人・近所」の76%が1番高くなっている。幼稚園に子どもを通わせる親たちの中には、親同士の交流に気を使い、負担に感じている人も少なくないようであるが、上述の結果からは通園年数とともに子育ての悩みを共通の話題として交流を深めている親たちの存在もあることが考えられ、親同士の交流の子育てへの好影響の可能性が期待される。

◎ 過年度との比較では、質問形式が異なる(択一方式を複数回答方式へ変更)ために直接的な比較はできないが、父親で平成12年度に一番多かった解決法が、「相談しない」であったのに対し、今回の調査では「親戚などの身内」が1位となっていた。近年、父親への育児参加が社会的にも求められる中で、今回は「相談しないが」33%、「親などの身内」に相談は47%、「友人・近所」への相談も29%となっていた。まだまだ母親に比べると低率であるとはいえ、子育ての悩みが父親にとってもより現実的なものとなり、相談せざるを得ない状況が生じたことと同時に、男女共同参画の推進の成果ともいえよう。

◎ 厳しい子育て状況の中で、誰にも相談できない親に対する焦点化された取組が今後は求められるが、その際、教育、保健・医療、福祉などの分野が総合的に関わっていくことが必要であろう。

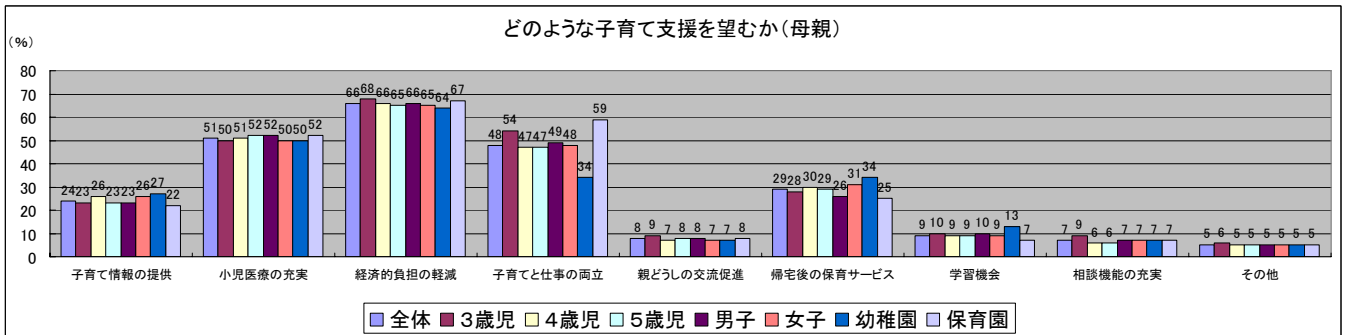
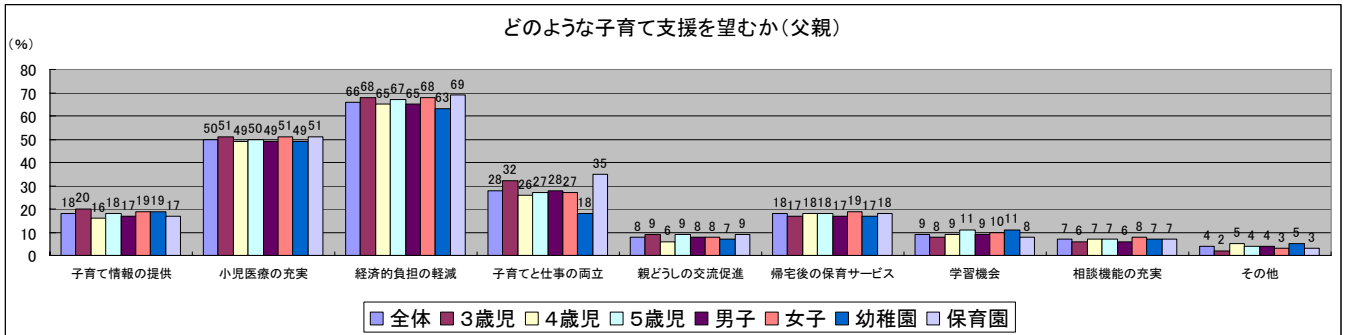


(7) 望んでいる子育て支援について

子育て支援として、どのような支援を望まれますか

○ 子育て支援として望んでいるものは、父母ともに「経済的負担の軽減」が一番で、それを選択した人が全体の6割以上を占めている。その後は「小児医療の充実」「仕事との両立の支援」が続いている。これら上位3つの項目は、直接教育にかかわるものではないが、どれも生活に密着した現実的な問題であり、福祉や少子化対策の課題として常に指摘されているところと一致する。

○ 子どもの年齢や男女別、幼稚園・保育所(園)でもその順位はほとんど変わらない。選択した割合をみると、「子育てと仕事の両立」を選択した母親が幼稚園34%に対して、保育所(園)59%と25ポイントの大きな開きがある。また父親についてもその割合は幼稚園18%、保育所(園)35%と後者の方が17ポイント高い。この差は共働きの親が、働きながら育児に直接関わることの大変さを、自分自身の問題として実感していることを示しているのであろう。一つの方策として企業、ひいては社会の意識を変え、子育て期の親に対する就労への支援や配慮を企業と協力して推し進められることが求められている。

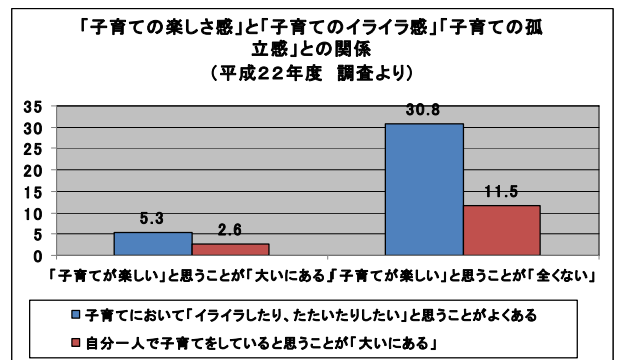


4. 「親の養育意識」に関するまとめ

- 幼児期の家庭教育に関しては子育ての大変さが取り上げられることが多いが、父母ともに9割を超えて「子育てが楽しい」という印象を持っている。配慮が必要であり、気になるのは「楽しめていない」という残りの1割である。ただでさえ子育ては、気力や活力、時間的にも経済的にも多大な労力を必要とする。

【資料3】

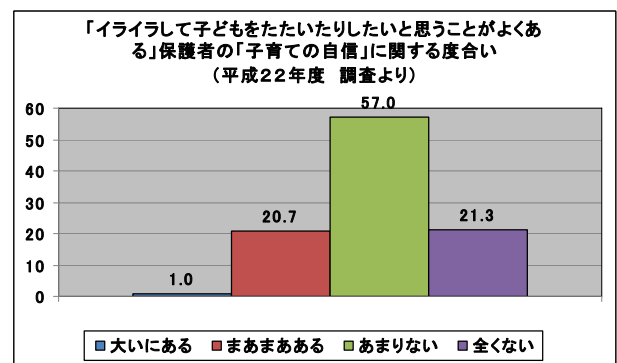
その中での「楽しめない子育て」は苦痛であり、精神的なバランスを崩し易い。虐待や親子の無理心中の防止の観点からも、こういった親子の存在を念頭に入れた支援が必要とされる。



- 「子育ての楽しさ」と「子育てのイライラ感」には関連性が見られた。【資料3】からわかるように、「子育てが楽しいと思うことが大いにある」と回答した親のうち、「イライラすることがよくある」と答えた割合が5.3%であったのに対し、「子育てが楽しいと思うことが全くない」と答えた親ではその割合が30.8%と、前者の約6倍となっている。

【資料4】

同様に「子育てが楽しいと思うことが大いにある」と回答した親のうち、「自分一人で子育てをしていると思うことが大いにある」と答えた割合が2.6%であったのに対し、「子育てが楽しいと思うことが全くない」と回答した親では「自分一人で子育てをしていると思うことが」が「大いにある」と回答した割合は11.5%と、4倍以上となっている。



いる。子育て不安の解消や虐待意識の軽減のためには「子育てが楽しい」環境づくりが求められるが、その場合、親を孤立化させないことは大切な要因といえよう。

● 【資料4】のように、「子育てにイライラしたり、子どもをたたいたりしたいと思う」ことが「よくある」親は、子育ての自信も低いことがわかり、子育ての自信をつくっていくことが重要であろう。子育て情報が多面的に入手できることは長所であるが、雑誌やネットによる情報だけでは、自信まで得ることは難しいようである。フェイス・ツー・フェイスでの対話や親同士の交流などの体験学習こそが、自信を育てていくことを改めて考えられるべきであろう。

○ 子どもの話を聴くことは、子どもを認めることであり、子どもも親の言うことを聴き、親を認めることにもつながる。傾聴や共感的受容は子育てにとって根幹技量の一つとなろう。子育ての楽しさには、様々な要因が絡んでいると思われるが、まずは目の前の子どもをありのままに認め、子どもが受け止められているという実感を伴うような触れ合いがその源になるであろう。長く待ち、しっかりと見守り、今回の調査で増加してきているスキンシップやアタッチメントなどの意識的な関わりは大切である。そのように子どもを見る目や時間をいかにつくるかが、親子交流の要である。さらに他の家族と交流したり、地域活動に参加することなどで親子関係が深まっていくのではないだろうか。

○ 家庭教育に関わり子どもを育てる上で最も気を配っていることは、父母共に「思いやり」であり、15年間「生活習慣」を抜いて1番割合が高い。「生活習慣」も「早寝早起き朝ご飯」で重要視されているが、確かに思いやりは、肯定的な人間関係を結ぶ上で大切なものである。しかし、思いやりを持つためには、お手伝いなどでの感謝される体験や、思いやられる体験、また、思いやりの態度を実際に見ること、そして、思いやりの態度を直接とってみる体験が重要となってくるであろう。

○ 個人主義が確立されてきている中、親自身が人間関係づくりを苦手としてきているといわれる。このように「思いやり」がトップに選ばれるようになった背景には、親のどのような心理が働いているのだろうか。

この考察には、この調査の別の質問項目が参考となる。すなわち子どもに関する不安・悩みの中で最も多いのが、「集団生活」であることと関連するのではないだろうか。

情報化が急速に進む複雑な社会の中に生きる大人にとっても、集団生活における人間関係の難しさは切実で、できるだけ摩擦が生じないような関わり方を選んでいることも少なくない。もし、その意識が強く働いているとすれば、自己主張を控え、他者に合わせるだけの消極的なしつけが強まり、結果的に人間関係を深められない子どもを育てることになりはしないであろうか。

○ 親自身も葛藤や対立を好まない場合が多く、そのことが子どもにもぶつかりあいや葛藤をさせず、何も問題がないことがよりよい子育ての基本となっている場合もある。このような心配をするのは、もともと日本の家庭教育において自己抑制の傾向が強いことと、子どもの参画による市民性の育成がなされておらず、一人前の大人になるための基準をもっていない現代の若者にいわゆる「指示待ち人間」が多いこと、また一見その対極にありそうな自己中心的で身勝手な振る舞いが目立つと言われていることを鑑みるからである。

変化の激しい現代社会、常に考え想像する力が求められる。本来、思いやりというのは、相手の立場に立ち、共感的に理解するということである。それは相手の中に一步踏み込んで理解しようとする積極的な人間関係づくりであり、それだけに主体的な行為でもある。そのように思いやる力が育まれるためには、その基礎に子ども自身が思いやってもらう体験はもちろんのこと、お手伝いや習い事など日常生活の中で子どもの主体性が尊重されること、他者との触れ合いの中で多少の摩擦をおそれずに乗り越える強さ、そして基本的な生活習慣が確立される中で安定する情緒の豊かさも必要であろう。親が子どもに「思いやり」を求めるとき、これらの点をしっかりと意識して育てることが重要である。

○ 親の養育意識の多様化がいわれる中、養育の目標とともに、自己評価と養育の悩みは、相互に関連して

いる。親子交流の設問で見られたように、今回、平成22年度は具体的な子どもとの触れ合いが増加しており、父親の直接的な育児参加が前回の調査の時よりも増加していると思われる。

- 意識ほどには家事や育児の実践は進んでいない現状もあるが、母親ばかりにお任せ状態でなくなったことから、しつけに関する父親の自信が高まると同時に、育児に関する悩みもより実感を伴った現実的な問題としてとらえられている。父親の育児参加が実質的に進んできている実態を今回の調査で見ることができた。しかしながら、母親における「しつけの自信のなさ」というマイナスの自己評価と、「子育ての孤立感」や「イライラ感」が減少していないことを考えると、父親側からのさらなる積極的な協力体制と、親の養育意識や実態に即した公的支援の発展が期待される場所である。
- 家庭の教育力の低下がいわれ、家庭教育についてその重要性が改めて問われる中、子育て意識や子どもとの関わりの実践が進んでいるが、子育ての自信が深められず、しつけに甘いと感じている親に対しての、情報提供や相談、そして各々の親が抱えている課題や活動を支えるための学習機会の提供等、さらなる総合的な環境整備が求められよう。

第5章 変遷と総合分析・提案

平成7年からの4回にわたる15年間の福岡県の幼児の親の家庭教育調査結果をもとに、幼児を持つ親の家庭教育の変遷を、(1)養育態度、(2)親子交流、(3)養育意識の3点から概観し、総合的に検討したうえで、調査結果に基づく提案を行う。

1 15年間の幼児に対する家庭教育の変遷

平成7年度、平成12年度、平成17年度、そして今回平成22年度の調査結果から、継続して共通に質問項目を設定しているものを中心に福岡県における幼児に対する家庭教育の変遷を概観し考察する。

(1) 養育態度

① 基本的な生活

食事の時にはテレビを消して団らんを

今回、初めて「食事の時にテレビを見ているかどうか」を尋ねたが、見ている割合が約3分の2であり、ゆっくりと食材を味わい会話をして食事をしていないのではとも推測される。また、食事は生活リズムだけではなく、親子のあり方にも関係するものではないかと考えられる。つまり、今回だけの調査結果から断定することは出来ないが、食事の時の親子交流、しつけ、団らんが大切であり、テレビを消して家族が1日に一度は食卓を囲むことが求められよう。

朝食の頻度を尋ねたが、「毎日食べる」が父親85%、母親86%と前回よりもさらに摂取率が高まり、大半の子どもが朝食を毎日食べている。「早寝早起き朝ご飯」運動、食育推進等の成果でもあろう。ただし、毎日食べていない約1割あまりの子どもの背景や今後の成長が心配であり、このような親への啓発・支援や食育をどうしていくかが今後の課題とされよう。親の意識不足だけではなく食事をつくる時間的な余裕が無い場合もあるようで、ワークライフバランスを再考していくことも求められよう。それと同時に、毎日食べていても食事の中身が問われる必要がある。食べているといっても菓子パンであったり、コンビニエンスストアで買ったものを車の中で食べていたりということも指摘されている。朝食の中身の重要性についての啓発をさらに進めるとともに、簡単につくれる食材や栄養を考えた朝食づくりの技能獲得のための支援も求められる。

早寝の実践の徹底を

前回同様、9時前に寝るべき幼児が、実際には全体の4分の1に過ぎない結果となっている。朝食が食べられないこと、自立起床ができないこと、そして、就寝時間が遅いこととの関連が示されており、よりよい生活習慣として早寝・早起き・朝ご飯が幼児の発達の基礎・基本となるためのさらなる徹底の必要性和、それが実現するための支援の工夫が問われる。「テレビ視聴時間」が長い子どもでは朝食摂取率が、前回同様に低下する。「ながら」で見せたり、親と共に長時間見せたりすることは控えるべきであり、9時には寝せる習慣づくりが求められる。

9時以降に寝る幼児の場合、メディア接触時間が長いという傾向があり、食事の時

にはテレビを消すとか、見ていないときにはスイッチを切るといった生活の中でのテレビとの意識的な関わりを持たせるような、メディアとのよりよい関係づくりのための取組も求められよう。

家族みんなで自立起床等の習慣づくりを

子どもに対する朝の起こし方「声をかけた」は、ここ15年間では母親は平成7年度53%、平成12年度55%、平成17年度56%、平成22年度55%、と過半数の母親が子どもに声をかけて起こしている。父親も平成7年度39%、平成12年度35%、平成17年度42%、平成22年度48%、と増加傾向であり、5割近くの父親が子どもに声をかけて起こしている。子どもが起きないときに放っておく父親の割合は、平成7年度20%、平成12年度14%、平成17年度9%、平成22年度6%、と減少し、着実に無関心・放任の父親は傾向としては減少しつつあると言えよう。

自立起床に変化はないが、幼児とはいえ、子どもの自律性を育むことが求められる。「目覚まし」による起こし方が少数で止まってはいるが、やがて子どもが親から離れることを考えれば、目覚ましにより自分で起きるといった体験学習も必要であろう。

子どもへの洗顔・歯磨きのさせ方は「手伝ってさせた」は、ここ15年間では母親は平成7年度15%、平成12年度20%、平成17年度23%、平成22年度26%、と着実に増加傾向であり、4分の1の母親が子どもを手伝ってさせている。父親も平成7年度13%、平成12年度22%、平成17年度24%、平成22年度32%、と増加傾向であり、こちらは母親よりも増加率が高く、3分の1近くの父親が手伝っている。親が忙しいということもあろうが、子どもの自律性を育むためには、子どもにまずさせて、時間をかけて待つことが求められよう。

メディア接触は新しい課題。子どもが自己コントロールできる環境づくりを

テレビ視聴時間はここ10年間1～2時間、2～3時間の割合が同じくらいで、それぞれ3割程度である。しかし、4時間以上は父親で6%から12%と増加傾向にあり、幼児のテレビ漬けの問題が一部の子どもにみられるといいであろう。ただし、現在では親も10年前に比べてテレビゲームやインターネットなどと接触する機会が増えている。幼児も5年前よりも若干増えており、幼児の段階から電子映像メディアに身近に接することが多いと言えよう。幼児期からのメディア接触習慣は、今後の子どもの生活習慣にも影響を及ぼすことが言われており、親は、その問題性に気づき、具体的にメディア接触をコントロールすると同時に、外遊びや親子交流、読み聞かせなどの時間をとることが必要であろう。

② 言葉と手伝いやほめたりしかり

自然なあいさつは、社会性やコミュニケーションの基本となる

子どもへのあいさつのしつけは両親とも「言えないときに注意する」は約6割で変化がないが、「言えたときにほめる」は父親がここ15年間で12%から17%に高まり、母親に変化は見あたらない。学校や地域であいさつの重要性が強く言われ、家

庭でも浸透してきているというのがここ15年の現状であろうが、母親の「親からいう」がここ15年で23%から16%と7ポイント下がっており、「親がやってみて、子どもに自然にあいさつを身に付けさせていく」ことがおろそかになってきているのではないかということも危惧される。

美しい言葉づかいは生活の基礎となる

「言葉遣い」について「きびしく注意する」と答えた母親は、ここ15年間で平成7年度20%、平成12年度24%、平成17年度25%、平成22年度31%、と増加傾向であり、3分の1近くの母親が厳しく注意している。父親も平成7年12%、平成12年度18%、平成17年度24%、平成22年度24%、と増加傾向が停滞している状況であるが、こちらも4分の1近くの父親が厳しく注意している。家庭の教育力低下が叫ばれる中、着実に指導は行われるようになってきている。「あまりしない」「まったくしない」は合わせて父親2割、母親1割と割合は少ないが、このような親には言葉の教育の大切さを伝えていく必要がある。言葉に関しては大切にしている傾向が出ていながらもかかわらず、誘拐など子どもの安全確保や危機管理のため「声をかけられても他人とあいさつしてはいけない」ということもあるかもしれない。しかし、相手とのコミュニケーションの基礎とも言えるあいさつに関して増加していない現状は、親自身の人間関係の狭まりや社会性の低下と関係があるのではないだろうか。あいさつは、相手の存在を認めることともつながり、礼儀もあるが、相手を尊重することにもつながっていくものである。

子どもの心の発達のために、もっとお手伝いを

お手伝いは、各地でその大切さが唱えられているが、家庭ではここ15年間増加がみられない。幼児にとって、役割や責任があるということは、たとえ、活動の時間がかかるにしても、とても重要である。感謝される体験によって感謝する心や自尊心も育っていくのであり、時間や労力、そして、多少の不便さはあっても幼児期からお手伝いをさせていきたいものである。そうした中では、親自身が態度で示すことや、子どもの生活習慣をよりよいものへと繰り返し形成していくことが重要となってくる。

男女参画、社会参画での総合的な家庭教育支援を

男女で区別した子育てについて、父親は減少傾向であるが、母親は今回、若干の上昇傾向もみられた。男女、性に関する考え方も多様化しており、現実として、進展途上にある男女共同参画社会の中で、その葛藤がみられるのではないだろうか。

また、ひとり親や再婚家族等、多様な家族に対するきめ細やかな支援も求められる。孤立化や崩壊が進んでいる家族に対しては、今後は届けていく取組も必要である。子育ての自信が必ずしも高まっていない現在こそ、親同士の交流や学習機会への参加によって、親が情報を交換し、協同し、支え合っていくことが求められよう。また、幼児に対して、幼稚園・保育所（園）の担任だけではなく、社会全体で重層的に子育てを支援する態勢が今こそ緊要である。子育てをするうえで、基本的に留意しておく

と子育てが楽しくなるような幼稚園・保育所（園）や社会の最低限のルールを親同士が確認していく一つ的手段として、福津市で実施している健診時の「メディアとのよりよい関係づくり・生活習慣づくりの研修」や春日市等が実施している大半の親が参加する「小・中学校入学前の説明会での家庭教育研修」は有効である。今後は幼稚園・保育所（園）やPTA・地域との連携を深める中で、さらに家庭教育を充実していくための工夫が必要である。

(2) 親子交流

ほめて育てる子育ての増加

平成7年度の調査報告書では「ほめる」ことの重要性が指摘され、今回の調査結果からも「ほめてやる」が「よくある」と回答した父母は増加傾向にあり、特に父親の「あまりない」「まったくない」は平成7年度の15%から平成22年度は7%に減少しており、「ほめる」関わりが増えてきていることが推測される。「しかる」に関しては、行っている親の割合が「ほめる」ことの方が推奨されていることもあってか、平成22年度は前回から増加していない。子どもの認知と受容では、最近の傾向として父親の子育て参加の意識や実態が調査結果として示された。しかし、「イクメン」が唱えられ、父親の育児への参画が進展してきている中、親の悩みも増加・深刻化している様相も示されており、父親の実践上の子育てのあり方に関する学習支援が求められる。

父親を含めた親子の関わりの充実を

ほめたり、しかったり、スキンシップをとったりと、子どもに関わろうとしている多くの熱心な親の姿がみられた。スキンシップを「よくする」割合は父親で平成7年度35%から平成22年度は50%と15ポイント増加し、母親も平成7年度41%から平成22年度は52%と11ポイント増加しており、スキンシップの大切さはずいぶんと理解され、実践されてきているといえる。

読み聞かせについては、今回からの質問項目であるが「よくする」父親1割、母親2割、「時々」は父親3割、母親4割と母親の割合の方が高いが、父親も半数近くがするようになってきている。読み聞かせの大切さの啓発や読み聞かせ支援のための図書館や子育てサークル・サロン、そして幼稚園・保育所（園）での活動が進展してきた成果であろう。文字活字文化の充実のためだけではなく、親子の関係づくりとしては、最適な親子交流の機会の一つであろう。

傾聴の大切さ

「話しかけてきたとき」に「いつも聞く」割合は父親で平成7年度調査から今回4ポイント増に対して、母親は8ポイント低下している。一見、様々な子育て情報が飛び交う中、子育てが充実しているように見えるが、実際は親自身の夜型で商業消費主義にとらわれた生活実態との関わりの中で、子どもの主体性を育むような子育てには必ずしもなっていないというのも実態であろう。父親が現実的に育児休暇が取れるなど親が子育てにじっくり関われるハード・ソフト面での社会・労働体制が求められる。

親がある一定の自信と責任をもって子どもと関わるという意識の醸成とともにそれを支える環境づくりが必要である。

(3) 養育意識

子育ては楽しさが基本

「子育てが楽しい」と思う割合は父親が平成12年度30%から平成22年は39%と9ポイント増、母親も平成12年度34%から平成22年度は39%と5ポイントであるが若干増加している。社会の子育て支援の体制が進んだこととともに父親の子育て参加が進んだことにもよるのではないかと推測される。ただし、若干減少しているとはいえ、逆に「楽しくない」親も1割程度相変わらず存在する。虐待や育児放棄など子どもに極端な形となった問題は、この1割の親から生じる割合が高いのではないかと推測される。「楽しくない」親の場合、「たたいりしたい」と思う割合が高い傾向にあり、楽しい子育てのための焦点化した協働支援が不可欠である。

「子育てが楽しいと思うことが大いにある」親の場合、「イライラすることがよくある」割合は5%に対して、「子育てが楽しいことが全くない」親では「イライラすることがよくある」割合が31%と26ポイントの大きな格差である。また同様に「子育てが楽しいと思うことが大いにある」親の場合、「自分一人で子育てをしていると思うことが大いにある」と思っている保護者は3%であったのに対して、「子育てが楽しいと思うことが全くない」親は12%と、9ポイント高くなっている。「楽しい」と感じることの大切さは今回の調査結果からも示されたが、「楽しい」と感じられるための家庭教育支援や親への環境づくりがなされているかが問われよう。

「しつけへの自信」を育てる支援を

「しつけへの自信」は「大いにある」と「まあまあある」を合わせた割合が父親であまり変化が無いのに対して、母親では平成7年度38%だったのに対し、今回は33%と5ポイント減少している。子育てに関する情報過多の中で、直接の子育て交流・学習が充分になされていないことが一つの要因であろう。

また、子どもをよく「しかる」の割合は、15年間で父親が9ポイント、母親が5ポイント増加しており、その一方で「子どものしつけに甘いと思うか」という質問に対して「大変甘い」と「まあまあ甘い」を合わせた「甘い」割合は、15年間で父親2ポイント、母親で10ポイント減少している。子どもに対する指導が増え、また甘くしなくても、「しつけの自信」はあまり変化がないという結果がみえる。

集団体験の積み重ねによって人間力の向上を

心の豊かさが求められている現代、今回の家庭教育調査結果からも、前回同様、家庭教育で最も気を配ることが「生活習慣」から「思いやり」へと移行してきている。人間関係の難しさを親子が身をもって感じていることの現れとも受け取れ、人間関係づくり体験の少なさ、人との深い交わりのなさが影響していると言えよう。子育ての孤立感やイライラ感を減少させるということも重要であるが、人間関係を自分からよりよいものへとつくり上げる体験や、人間関係における問題を解決するための体験

が必要である。そのことこそ、幼児教育に求められる課題であり、親子の集団での直接体験の充実により図られるべき事項であろう。

不登園意識を持つ幼児の割合は1割を超えている。「悩み」においても15年間で明らかに増加した項目は「集団生活」である。親自身に集団体験が少なく、苦手になっているのではということも考えられるが、集団生活を意図的に仕組み、幼児期における葛藤体験や失敗体験を恐れず、少しずつ成功体験を重ねさせることによって、将来的にしなやかでたくましい人間へと成長できるのではないだろうか。

2 総合的分析と提案

(1) 子どものよりよい成長・発達を基本とした現代の幼児における家庭教育の充実を

① 現代社会における幼児期家庭教育の課題を明確に

コモーションリズムが複雑・肥大化している商業消費社会の中、家庭における幼児の生活習慣の改善にはメディアが大きな要因の1つであることが明確となってきている。今の日本の子どもは就寝時間が遅い。当然、睡眠時間も短くなっていく。生活リズムの大切さを実際の育児実践に結びつけることに親が本気で気づき、理解する必要がある。幼児の段階でも基本的な生活習慣のリズムを子どもが少しずつ自分で整えていくことが大切である。幼児は遊びを中心とした生活の中で、自分自身、楽しみながら生きていくと同時に、家庭や地域や社会で役割と責任をもつ社会的存在として、一人の大人や市民になるための資質を身に付けていく方向で生活していくことが必要である。そのために幼児期に求められる家庭教育の基本的な方向性や留意点を押さえていくことが求められる。子どものよりよい成長・発達を最重要の基本として、発達段階を考慮しながらの親への支援が、可塑性の高い幼児であるためにより必要である。発達途上にある幼児に対しては、特に、親や保護者、そして、周りの大人は幼児の言葉に耳を澄まし、幼児が自己決定しながら判断していく力を付けていくことが今後は不可欠であろう。読書離れや低学力の問題が指摘される中、どこまで教えるべきなのか、早期教育をしないと子どもに良くないのではという考えもあるが、外遊びやお手伝いなどによる子どもの発達にとって大切な生活体験学習こそ、今、求められるものであろう。幼児にとって必要な生活、体験、学習を改めて構造化し、明示していくことが今後は求められる。

② 家庭教育の実践的基本的周知を

インターネットなどによる家庭教育情報が増大している中、家庭教育の自信は逆に減少しているという実態がある。親子交流では、スキンシップの充実は著しく、「ほめる」等、家庭教育での技術的な面に関心が向けられ、親の取組がよい方向でなされてきているのではと思われる。しかし、人間の基本としてのあいさつなどの人間関係に関する生活習慣を親が自然に見せ、しつけとして習慣付けられていくことは増えておらず、今後は人間関係の希薄化や孤立化、そして、地域共同体の崩壊に対応した家庭教育支援が不可欠である。確かに家庭教育は私事性の高いものであるが、家庭教育の基本として「他人は自分と異なる存在であり、異文化である」「共通の直接体験を

親子でしていこう」「それぞれの家庭独自の教育方針をつくろう」「家族の対話や団らんを大切にしよう」「自分がされていやなことはしない」「他人に迷惑をかけない」「社会の一員としての権利と義務を担っていく」などといったことの共通事項の確認が求められてきている。

多様化している家族、教育以外の分野での課題と並行して、全体的な家庭教育支援と共に、厳しい家庭に対して家庭教育支援が届きにくいという現状がある。都市化、過疎化、核家族化、家族の多様化の中、NPOや地域の子育て支援グループが活躍してきているが、そうした中で、対象を絞った支援、家庭教育を支える地域の教育力が、保育所や幼稚園も含めて総合的に考えていく必要がある。

(2) 子どもに関係する各分野が連携した取組の必要性

① 幼児期の家庭教育に関する分野は情報共有を

幼児期の教育の課題は多岐にわたると同時に、親、関係施設、教育だけでは解決できない問題も多い。

調査結果にみられるように、幼稚園と保育所（園）の親の家庭教育には差違があり、また、調査結果には表れていないが個々の幼稚園や保育所（園）における幼児教育・保育の実態も当然多様であることがうかがわれる。小1（6歳児）プロブレムと呼ばれる小学校1年時における学習に集中する能力不足や心身への負担による学校拒否・集団への不適応問題等は、こういった多様な就学前教育、そしてそれとも関わる多様な価値観に基づいた家庭教育の自由性・多様性にも一因があると考えられる。

行政は多様な幼児教育・保育状況の中、子どものよりよい心身の発達を保障するため、福祉と教育の連携により、関係する情報の提供・交換や交流の場を設け、保幼小のつながりをつけていくなどの取組をする必要がある。現在は、保幼小の交流や連携の実践が進められつつあり、情報共有も着実に進められているが、まだ、充分とはいえない。そして、全体的な家庭教育内容・方法と背景・要因・対象別の家庭教育内容・方法を考慮し、親が取り入れる情報提供の内容・方法が改めて問われている。

② 幼児期の家庭教育に関係した分野の連携・融合の強化を

「子ども部」や「子ども課」などという名称で、総合的な体制で子どもの家庭教育支援を行う市町村が増加してきている。行政は、家庭教育に関する情報提供・相談など身近な事業に対する現場や親の顕在的・潜在的なニーズを明確にすると同時に、医療・保健分野も含めて子どもに関係した各分野が連携することが必要である。また、子どもの支援の短期・中期・長期での総合的な充実を図っていくという方向性を明示し、育児不安・虐待の早期発見や、家庭教育を楽しみ子育てに自信を持つことができるような訪問指導の充実等、身近に幼児を持つ家庭に直接届く形式で独自の展開を図る必要もあろう。

自由記述では「医療の充実」「経済的支援」「子育てと仕事の両立」「子育て情報の提供」を求める親の意見が多く、教育以外の分野への要望が高かった。また、安全な「遊び場」と保育時間の延長を求める意見も多く見られた。

安全性の確保のためには各分野が連携するとともに、地域社会の協力が不可欠であ

り、青パトによる巡回や登下校時の「見守り隊」の拡充など、既に危機管理のための活動を行い、成果を出してきている地域も多く現れてきている。子どもにとって本当に必要な環境とは何なのか、子どもにとって、特に幼児期に必要な体験や学びはどういったもので、どういった方法で拡充するのがよいのか、改めて関係分野が連携して考え、実践し、改善していく時が来ているのではないか。

男女共同参画社会の中で親の就労参加や労働時間が延長され、自由記述でも保育時間の延長を求める意見が多々見られた。総務省「就業構造基本調査」（平成19年）でも、25歳から40歳の女性の潜在有業率は20%に登っている。つまり25歳から40歳の女性の20%は就業を望んでいるのであるが、我が国では、母親にとって十分な就業環境の整備が進んでいるとはいえない。また、そのような環境下においては、就業した母親の子どもがよりよい成長・発達のための家庭教育を十分に受けることができず、置き去りにされる可能性も出てきている。さらに、特別支援が必要な子どもについての悩みや意見もあり、まずは、生活、医療・保健、福祉などの子どもに関わる分野が情報を十分に共有する必要がある。

また、労働時間の短縮や、育児のための企業等の支援、そして何よりも社会全体が子育てや家庭教育を社会の重要な責務として、子育てを認めていく意識を拡充することが重要である。幼稚園と保育所では実態が少し異なっており、しつけや幼児期の教育・保育など幼保を超えた協働の取組が今後は必要であろう。市町村によっては子ども部などを首長部局に創設し各分野を統合した子どものための部局で事業を行っている所も出てきているが、やはり、子どもを中心とした社会・政策実施体制が不可欠である。

③ 幼児とメディアの関わりの改善を

現代的な課題として、絵本や本などの文字活字文化に関わるメディアに加え、テレビ、ゲームなどの電子映像メディア、そして、パソコン・ケータイ・ゲーム他を活用したネットメディアの肥大化が幼児の周りでもみられる。映像・ネットメディアに関しては、長時間接触の問題として視覚聴覚障害等の身体的影響の発生もいわれるが、それ以上に、長時間接触によって親子の交流や外遊び等、子どもとしての経験が奪われていることが危惧されている。今後は、本の文化の充実やテレビやゲームを利用しない子どもの時間・空間・仲間を取り戻すことが大切である。地域の公園の充実に加え、最近では プレイパークや子どもの居場所づくりなど、幼児も外遊びが楽しめる場づくりの試みが進展してきており、そのような場での親子交流や体験活動の充実が求められる。

メディアについての教育は家庭だけではなく、幼稚園・保育所、地域社会、そしてメディアの提供側と協働しながら、よりよい関わり方を親や子どもが学んでいくことができる機会を設けることが必要である。

(3) 親の主体的家庭教育の充実を

① 新しい状況に対応した親参画による家庭の教育向上を

今後は、親・市民と行政が協働し、市民参画やコミュニティを大切にした家庭教育

に関する取組が求められよう。高度情報社会の中、自由記述でも、「mixiなどで日記に書いてアドバイスをもらったりしている」「インターネットで同じ悩みや不安を抱えている人のサイトを見る」など、個人が主体的に情報を得、また、発信していく実態もみられるようになってきている。もちろん、インターネットの情報には根拠や真偽が明確でない場合もあり、慎重に正しい情報を得るようにと考える必要があるが、メディアを文脈から批判的に読み解いていくメディア・リテラシー教育は我が国では充分ではなく、今後こういったネット情報に対する啓発・教育が家庭教育でも重要となろう。福岡県も子育て情報をネットで提供するようになってきているが、インターネットによる情報取得の実態が、自由記述に多く述べられるなど、親は多くの子育て情報を獲得し、そして実際に子育てにそれを生かしている場合も少なくなく、有効な点は多々ある。しかし、「他人に話しても解決しないので、そのまま時間が過ぎていくだけで、悩んだまま」という意見も見られ、また、「直接話せる機会や親子で参加できる事業の情報提供や気軽に相談できる相談機関が少ない」という意見も見られた。一部の親は社会の変化の早さに振り回され、子どもとの本当によい関わり方がわからず、子育てに対する自信を深めることなく、子どもへの圧迫感を醸し出している状況もみられる。よりよい家庭教育を行うためには、親が主体的に子育てを振り返り、主体的に人と関わり、生涯学習を行うことが不可欠である。雑誌・ネット等による知識だけではなく、子育てに必要な基本的共通事項と一緒に理解したり、実際に他の家族と交流したり、多様な子育ての現場に出会ったりといった機会が親は成長していくのではないだろうか。

② 家庭教育を楽しむことができる親教育の充実を

子どもの問題が出る度に親が責められ、親の家庭教育不足、親自身を教育する必要があるといわれる。しかし、今、大切なことは、親も含めての幼児期家庭教育の※エンパワーメントであり、NPO、サークル・サロン、幼保、地域の教育力など親を取り巻く、総合的な家庭教育のエンパワーメントである。

親の主体的な家庭教育を支援していくために、親の青少年期に親教育を学校で体系的に実施したり、産婦人科と小児科が協力して親主体の子育てのための学習機会を継続的に充実させたりするなど、親としての教育を段階的・継続的に実施していく必要が出てきているのではないだろうか。確かに父親の家庭教育への意識や参加は着実に増加しつつあるという調査結果であるが、悩みはむしろ増大し、家庭教育を楽しみ、充実して携わっているとはいえない。

家庭教育が完璧に出来る親などほとんどいない、親は幼児と関わり、相互作用する中で学んでいき、成長・発達していくのである。祖父母や親族の養育機能も変化してきている中、新しい形での家庭教育力の形成が求められてきている。

子育てでサークルや自主的な保護者学習会などで学ぶ親もある一定存在する。そうした中で、できるだけ多くの子育てに悩んでいる親や、子どもにとって適切とは思えない家庭教育を行っている親に対する学びの機会提供は、子どもの人権保障という視点から緊要な課題であろう。親が主体的に学び、子育てに生きがいを感じ、人間として成長していくという方向を持ってこそ、子どもも生きる力をつけていくことが可能と

なるのではないだろうか。そのためには、子どものよりよい成長・発達が最重要であるとの共通確認を家庭教育に関わる全ての人を持つことが重要である。さらに、親に寄り添いながらその主体性を引き出し、家庭教育の支援・促進・指導を行っていく人材の養成や子どものよりよい成長に関わる各分野をつなぐコーディネーターの養成が今後、より一層求められよう。

※エンパワーメント・・・個人が自分自身の力で問題や課題を解決していくことができる社会的技術や能力を獲得すること。

第 6 章 參考資料

平成22年度 幼児（3．4．5歳児）をもつ保護者の子育てに関する調査実施要項

1 調査の趣旨

少子高齢化や人間関係の希薄化等、社会状況の変化に伴い家庭の教育力は著しく低下してきている。

このような中、現在の家庭教育の問題点とその原因等を明らかにするために、3．4．5歳児を持つ保護者の養育態度や意識の実態について調査し、その分析をとおして、今後の家庭教育支援・子育て支援の在り方や方向性を解明していく。

2 調査の実施者

福岡県立社会教育総合センター

3 共催

福岡県教育文化奨学財団

4 調査の対象及び人数

県内8地区の3歳児、4歳児、5歳児をもつ男性・女性の保護者、それぞれ400名程度を抽出する。

※本調査は、平成7・12・17年に続き、5年ぶりの経年調査であり、基本的に前回調査園（所）を対象とする。

【地区別調査対象園（所）数】 政令市以外は、教育事務所担当地区

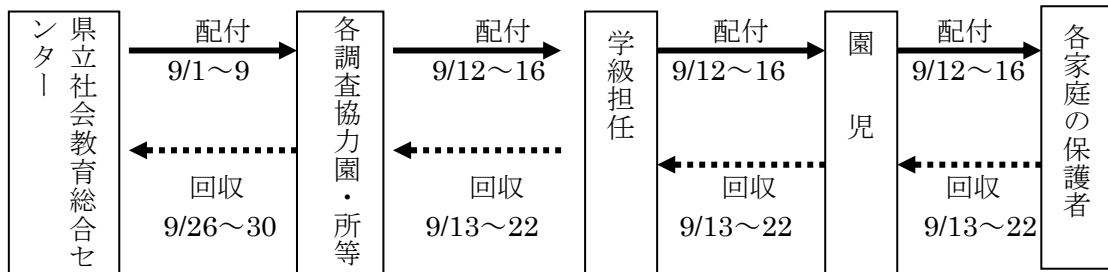
福岡市	4	北九州地区	7	筑豊地区	4
北九州市	5	北筑後地区	3	京築地区	4
福岡地区	7	南筑後地区	2	<u>計36園（所）</u>	

5 調査の実施機関

平成22年9月

6 調査方法

- (1) 3．4．5．歳児とも男性、女性の保護者別に質問形式の調査票により行う。
- (2) 調査票は、県立社会教育総合センターが該当園（所）へ送付し、担任を通して各保護者へ送付・回収、その後、同センターが同園（所）で受領する。



7 調査票（別紙参照）

なお、回答用紙は子どもの年齢と保護者の性別により次のように色分けする。

	3歳児	4歳児	5歳児
男性	うぐいす	そら	レモン
女性	オレンジ	もも	ぞうげ

8 調査結果の処理

調査結果を家庭教育指導資料としてまとめ、その結果を関係機関・団体等に配布する。

9 調査協力幼稚園・保育園（所）

教育事務所 政 令 市	幼稚園・保育所（園）名	教育事務所 政 令 市	幼稚園・保育所（園）名
福岡市	福岡市立和白幼稚園 福岡市立雁の巣幼稚園 福岡市大濠聖母幼稚園 福岡市屋形原保育園	北九州市	北九州市立足原幼稚園 北九州市立小倉南幼稚園 北九州市花かご保育園 北九州市広済寺保育園 北九州市大川保育園
福岡 教育事務所	篠栗町立篠栗幼稚園 篠栗町立北勢門幼稚園 粕屋町立仲原保育所 粕屋町立粕屋西保育所 粕屋町立大川保育所 粕屋町立粕屋中央保育所 大野城市平野保育所	北九州 教育事務所	鞍手町立剣第一保育所 鞍手町立剣第二保育所 鞍手町立古月保育所 鞍手町立西川第一保育所 鞍手町立西川第二保育所 中間市中間幼稚園 中間市中間中央幼稚園
北筑後 教育事務所	小郡市立三国幼稚園 久留米市立中村保育所 久留米市立大城保育所	南筑後 教育事務所	大川市立木室幼稚園 柳川市立六合保育園
筑豊 教育事務所	田川市立伊田幼稚園 田川市立後藤寺幼稚園 田川市紅百合保育園 田川市立西保育所	京築 教育事務所	豊津町立豊津保育所 豊津町立祓郷保育所 豊津町立節丸保育所 苅田第一幼稚園

幼稚園数：14園 保育園（所）：22園（所）

幼児(3・4・5歳児)をもつ保護者の子育てに関するアンケート

●次のアンケートにお答えください。なお、答えは特別に指示があるものをのぞき、選択肢からもっともあてはまるものを1つ選び、回答用紙に番号を記入してください。

1 あなたのお子さんは、朝食を食べていますか。

- | | |
|-----------|---------------|
| 1 毎日食べている | 2 ほとんど毎日食べている |
| 3 時々食べている | 4 食べていない |

2 あなたのお子さんは、だいたい何時に寝ていますか。

- | | | |
|-------------|-----------|------------|
| 1 午後8時前 | 2 午後8時～9時 | 3 午後9時～10時 |
| 4 午後10時～11時 | 5 午後11時以降 | |

3 あなたは、今朝お子さんをどのように起こしましたか？

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 声をかけた | 2 目覚まして起きた |
| 3 起こす前に自分で起きた | 4 起きるまで放っておいた |

4 あなたは、お子さんに洗顔や歯磨きをどのようにさせてますか？

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 言わなくても子どもがしている | 2 言ってさせている |
| 3 手伝ってさせている | 4 しなくても子どもに任せている |

5 あなたのお子さんは、食事中、テレビを見ていますか？

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 テレビを消しているので見ていない。 | 2 テレビをつけているが見ていない |
| 3 時々見ている | 4 いつも見ている |

6 あなたのお子さんは、ふだん1日にどのくらいテレビ（ビデオも含めて）を見ていますか？

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1 1時間以下 | 2 1～2時間 | 3 2～3時間 |
| 4 3～4時間 | 5 4～5時間 | 6 5時間以上 |

7 あなたのお子さんは、テレビゲーム（携帯型ゲームも含む）を1日どれくらいしていますか。

- | | | |
|---------|---------|-----------|
| 1 全くしない | 2 30分以下 | 3 30分～1時間 |
| 4 1～2時間 | 5 2～3時間 | 6 3時間以上 |

8 あなたは、お子さんに「はい」「ありがとう」「おはよう」などの基本的あいさつをどのようにしつけていますか？

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1 言わないときに注意する | 2 言えたときにほめてやる |
| 3 注意はしないが、親から言ってみせる | 4 特別にしつけてはいない |

9 あなたは、お子さんの言葉の乱れや流行語の使用をきちんと注意していますか？

- | | |
|--------------|-------------|
| 1 厳しく注意している | 2 一応注意している |
| 3 あまり注意していない | 4 全く注意していない |

19 あなたは、お子さんのしつけに自信がありますか？

- | | |
|---------|----------|
| 1 大いにある | 2 まあまあある |
| 3 あまりない | 4 全くない |

20 あなたは、お子さんのしつけに甘い方ですか。

- | | |
|----------------|---------------|
| 1 大変甘い方だと思う | 2 まあまあ甘い方だと思う |
| 3 あまり甘くない方だと思う | 4 全く甘くない方だと思う |

21 あなたは、子育てが楽しいと思うことがありますか。

- | | |
|---------|----------|
| 1 大いにある | 2 まあまあある |
| 3 あまりない | 4 全くない |

22 あなたは、自分ひとりで子育てをしていると思うことがありますか。

- | | |
|---------|----------|
| 1 大いにある | 2 まあまあある |
| 3 あまりない | 4 全くない |

23 あなたは、子育てにおいてイライラしたりして、お子さんをたたいたりしたいと思うことがどの程度ありますか？

- | | |
|---------|----------|
| 1 よくある | 2 まあまあある |
| 3 あまりない | 4 全くない |

24 現在、あなたは育児のことで不安に思ったり悩んだりしていることはありますか。

- | | |
|------|---------|
| 1 ある | 2 特にはない |
|------|---------|

※ 「1 ある」と答えた方にお聞きします。

今、特に不安に思ったり悩んだりしていることは何ですか。

あてはまるものを回答用紙に記入してください。（複数回答可）

- | | |
|--|----------------------|
| 1 子どもの身体の発育・発達に関する事 | 2 子どもの健康・医療に関する事 |
| 3 話す、書く、読むことなど、子どもの知的発達に関する事 | |
| 4 友だちとの遊びや友人関係など、子どもの集団生活に関する事 | |
| 5 睡眠、排泄、おねしょ、好き嫌い、服の着方など、子どもの生活習慣に関する事 | |
| 6 反抗や甘えなど、親子関係に関する事 | 7 子どものしつけに関する事 |
| 8 粗暴・飽きっぽい・内気など、子どもの性格・情緒に関する事 | |
| 9 経済的なこと | 10 子どもの事故や犯罪被害に関する事 |
| 11 仕事と子育ての両立に関する事 | 12 育児の悩みの相談先について |
| 13 地域での安全な遊び場所について | 14 配偶者や家族の育児への協力について |
| 15 子どもが幼稚園、保育園（所）から帰った後の子どもの世話について | |
| 16 地域のお父さん・お母さんとの交友関係について | |
| 17 子どもを好きになれないなど、子どもへの愛情に関する事 | |
| 18 その他（回答欄に具体的に御記入ください。） | |

- 25 お子さんが、幼稚園、保育園（所）に行きたがらないことがありますか？
- 1 よくある
 - 2 まあまあある
 - 3 あまりない
 - 4 全くない
- 26 あなたは、育児で困ったり不安に感じたことを主にどのように解決していますか？
あてはまるものを回答欄に記入してください（複数回答可）
- 1 親など身内の育児経験者に相談して
 - 2 友人や近所の育児経験者に相談して
 - 3 育児書を読んだりテレビを見たりして
 - 4 幼稚園や保育園の先生に相談して
 - 5 行政や民間の教育相談（電話相談）を利用して
 - 6 医師などの専門家に相談して
 - 7 相談せずに自分で考えて
 - 8 その他（回答欄に具体的に御記入ください。）
- 27 あなたは、子育て支援として、どのような支援を望まれますか。
あてはまるものを回答欄に記入してください。（複数回答可）
- 1 子育てに関する情報の提供
 - 2 小児医療の充実
 - 3 経済的負担の軽減
 - 4 子育てと仕事の両立支援
 - 5 親同士の交流促進
 - 6 幼稚園・保育園（所）後の保育サービス
 - 7 家庭教育や子育てについて学習する機会
 - 8 家庭教育や子育ての相談機能の充実
 - 9 その他（回答欄に具体的に御記入ください。）

御協力ありがとうございました。

○歳児の○性保護者用

幼児(3・4・5歳児)をもつ保護者の子育てに関するアンケート(回答用紙)

●次の表の該当する番号を○で囲んでください。

お子さんの性別	お子さんの年齢 及びきょうだいの有無	記入者	記入者の年齢
1 男	1 満3歳	1 父親 2 母親 3 その他	1 10歳代
	2 満4歳		2 20歳代
3 満5歳 ※4月1日現在	3 30歳代		
2 女	1 有		4 40歳代
	2 無		5 50歳代
			6 60歳代以上

●それぞれの質問について、選択肢から選んだ番号を口の中に記入してください。

1 2 3 4 5

6 7 8 9 10

11 12 13 14 15

16 17 9の場合
→→→ ※9を記入した場合(具体的記述)

18 2, 3, 4の場合
→→→→→ ※具体的な習い事

19 20 21 22 23

24 1の場合
→→→ ※複数回答可
※18を記入した場合(具体的記述) 25

26 ※複数回答可
※8を記入した場合(具体的記述)

27 ※複数回答可
※9を記入した場合(具体的記述)

☆ 御協力ありがとうございました。 ☆

		率(%)								
	選択肢	全体	3歳児	4歳児	5歳児	男子	女子	幼稚園	保育園	
23. 子育て イライラ	父親	大いにある	7	7	6	8	8	6	5	8
		まあまあある	32	33	32	33	31	34	33	32
		あまりない	42	41	42	43	42	43	41	43
		全くない	18	19	19	17	19	17	21	16
		無回答	0	0	0	0	0	0	0	0
	母親	大いにある	12	13	11	11	13	10	10	13
		まあまあある	44	45	44	42	41	46	46	42
		あまりない	36	34	37	38	36	37	36	37
		全くない	8	8	8	9	9	8	7	9
		無回答	0	0	0	0	0	0	0	0
24. 子どもの不安・ 悩み	父親	ある	44	45	43	45	43	46	43	45
		特にない	55	54	57	55	57	53	56	55
		無回答	1	1	1	0	0	1	0	1
		身体の発育・発達	7	6	6	8	7	6	5	8
		健康	10	10	8	11	9	11	8	11
		知的発達	10	11	9	11	10	11	9	11
		集団生活	20	19	19	21	19	21	20	20
		生活習慣	9	9	10	7	9	8	8	9
		親子関係	8	8	7	9	7	10	8	8
		しつけ	12	14	12	12	10	15	10	14
		性格・情緒	12	12	13	12	11	14	11	14
		経済	9	7	11	9	9	9	9	9
		事故・犯罪被害	9	8	9	10	7	12	7	11
		仕事との両立	6	7	5	5	7	5	4	7
		相談先	0	0	0	0	0	0	0	0
		遊び場所	6	5	6	6	6	5	5	6
		育児への協力	1	2	1	2	2	1	2	1
		帰宅後の世話	2	3	1	3	2	2	1	4
		交友関係	2	2	2	2	3	2	1	3
		子供への愛情	1	0	1	0	1	1	1	1
その他	2	1	5	1	3	1	5	0		

		率(%)								
	選択肢	全体	3歳児	4歳児	5歳児	男子	女子	幼稚園	保育園	
24. 子どもの不安・悩み	ある	60	63	60	57	60	59	55	63	
	特にない	40	36	40	42	40	40	44	37	
	無回答	0	0	0	0	0	1	0	0	
	母親	身体の発育・発達	7	7	6	7	8	5	6	7
		健康	10	12	11	9	10	10	8	12
		知的発達	11	11	11	11	14	8	9	12
		集団生活	21	18	21	23	22	20	23	20
		生活習慣	14	18	14	11	14	13	13	14
		親子関係	16	19	15	16	16	16	13	18
		しつけ	21	22	21	19	22	19	18	22
		性格・情緒	18	17	17	18	19	16	16	19
		経済	12	11	12	12	11	13	9	14
		事故・犯罪被害	10	9	10	11	9	11	8	11
		仕事との両立	14	19	11	13	13	14	5	20
		相談先	1	1	1	1	1	1	1	1
		遊び場所	6	4	7	8	6	6	6	6
		育児への協力	6	5	6	5	6	6	6	5
		帰宅後の世話	4	6	3	4	4	4	2	6
		交友関係	5	4	3	6	4	5	5	4
		子供への愛情	1	1	1	1	1	1	0	1
その他		2	2	3	2	2	2	2	2	
25. 不登園(所)		父親	よくある	2	6	1	1	2	2	2
	まあまあある		12	15	12	10	14	9	8	15
	あまりない		37	43	36	35	38	36	27	45
	全くない		46	33	48	53	43	50	61	34
	無回答		3	4	3	2	3	2	2	3
	母親	よくある	3	7	3	2	4	3	2	5
		まあまあある	13	18	14	11	14	13	8	17
		あまりない	36	43	36	33	38	35	28	43
		全くない	46	33	46	54	44	48	62	34
		無回答	1	0	1	1	1	1	0	1

		率(%)								
	選択肢	全体	3歳児	4歳児	5歳児	男子	女子	幼稚園	保育園	
26. 解決方法	父親	親・身内	47	55	44	45	47	47	44	49
		友人・近所	29	28	31	27	28	29	29	28
		育児書	13	14	13	12	12	14	15	11
		先生	10	11	7	13	9	11	8	12
		教育相談	1	0	0	1	0	1	0	1
		医師等専門家	4	5	4	5	5	3	4	4
		相談しない	33	26	37	35	33	35	34	33
		その他	11	14	10	11	10	12	13	10
		無回答	4	4	4	3	3	4	3	4
	母親	親・身内	71	72	70	70	70	72	75	68
		友人・近所	70	67	70	73	69	72	76	67
		育児書	20	21	20	19	19	20	23	17
		先生	41	39	40	43	39	42	39	42
		教育相談	2	2	1	2	3	1	2	2
		医師等専門家	8	8	8	8	9	7	9	8
		相談しない	13	13	14	12	13	13	11	14
		その他	5	6	4	6	6	5	6	5
		無回答	1	1	1	1	1	1	0	1
27. 支援内容	父親	子育て情報の提供	18	20	16	18	17	19	19	17
		小児医療の充実	50	51	49	50	49	51	49	51
		経済的負担の軽減	66	68	65	67	65	68	63	69
		子育てと仕事の両立	28	32	26	27	28	27	18	35
		親どうしの交流促進	8	9	6	9	8	8	7	9
		帰宅後の保育サービス	18	17	18	18	17	19	17	18
		学習機会	9	8	9	11	9	10	11	8
		相談機能の充実	7	6	7	7	6	8	7	7
		その他	4	2	5	4	4	3	5	3
		無回答	3	2	4	2	2	3	3	3
	母親	子育て情報の提供	24	23	26	23	23	26	27	22
		小児医療の充実	51	50	51	52	52	50	50	52
		経済的負担の軽減	66	68	66	65	66	65	64	67
		子育てと仕事の両立	48	54	47	47	49	48	34	59
		親どうしの交流促進	8	9	7	8	8	7	7	8
		帰宅後の保育サービス	29	28	30	29	26	31	34	25
		学習機会	9	10	9	9	10	9	13	7
		相談機能の充実	7	9	6	6	7	7	7	7
その他		5	6	5	5	5	5	5	5	
無回答		1	2	1	1	1	2	1	2	